三重県埋蔵文化財調査報告196

南山ノ奥6号墳

発掘調査報告

——上野市古郡所在遺跡の調査——

1999. 3

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の西北部に位置する伊賀盆地は、古来より伊賀国の中心として高い文化を形成してきた地域であります。この伊賀盆地を貫流する木津川は、生産性の高い肥沃な土地を形成し、この地域の遺跡は、木津川の流れとともに古くから発達してきました。特に、その国名と同じ「伊賀」を郡名にもつ旧伊賀郡は、古代から中心的な地域であったようで、古墳時代には石山古墳や美旗古墳群などの古墳をはじめ、貼り石をもつ大溝や当時としては国内最大級の掘立柱建物が見つかった城之越遺跡など、三重県を代表する遺跡が存在しています。

さて、今回の報告書は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴って緊急発掘調査を実施しました南山ノ奥６号墳を掲載しております。この古郡地区は、前述の城之越遺跡が所在する比土地区に隣接する位置にあって、上野市南部でも特に重要な地域であるといえます。調査の結果、複数の埋葬施設と数多くの副葬品をもつ古墳であることが判明し、あらためてこの地域の重要性は再認識されました。しかし、このような貴重な古墳が記録保存というかたちでしか残せないのは残念というほかありません。また、調査が終了すればそれでおわりというものでもありません。今後、調査の成果を三重県の財産としてどのように活用していくかが、わたしたちに課せられた重要な課題であると考えております。

調査にあたりましては、地元のみなさまをはじめ、県農林水産商工部・伊賀県民局農林商工部から多大なご協力とともに暖かいご配慮を頂きました。また、上野市教育委員会からは多大なご支援をいただきました。文末ではありますが、みなさまの誠意あるご対応に心からのお礼を申し上げます。

1999年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　大井與生

例　　言

1　本書は、三重県上野市古郡字南山ノ奥地内に所在する南山ノ奥６号墳の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成10年度農林漁業用揮発油税財源身替道路整備事業（上野南部２期地区）に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。調査にかかる費用は、三重県農林水産商工部が負担した。

3　調査は平成10年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
主幹兼調査第一課長　山田　　猛（総括）
調査第一課第一係長　竹内　英昭（調整）
主事　木野本和之
調査協力　　上野市教育委員会
調査協力員　　上野市教育委員会文化課調査係主任　増田　博

4　調査にあたっては、上野市古郡・比土在住の方々、地権者　東勢昭彦氏をはじめ、県農林水産商工部農山村振興課・伊賀県民局上野農林商工部から多大な協力を受けたことを明記する。

5　現地調査には、三重県埋蔵文化財センターの竹内英昭・船越重伸・原田恵理子・萩原義彦・濱辺一機・杉崎淳子・瀬野弥知世が参加し、担当者を補佐した。

6　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課・資料普及グループ及び上野市教育委員会文化課が行った。

7　本書の執筆は、木野本・増田が分担し目次と文末に明示した。なお、全体の編集は木野本が行った。

8　挿図の方位は、全て真北である。なお、磁北は西偏６°20′（平成２年）である。

9　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

10　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき　……　「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。
わん　……　「椀」「碗」「鋺」があるが、「椀」を用いた。

11　付編として、パリノ・サーヴェイ株式会社による各埋葬施設から出土した赤色顔料の科学分析結果の報文を掲載した。

12　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

13　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… （木野本） 1
　1 調査の契機 …… 1
　2 調査の経過 …… 1
　3 調査の方法 …… 2
　4 遺跡の名称について …… 2
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… （増　田） 3
Ⅲ　調査の成果 －遺構と出土遺物－ …… （増　田・木野本） 7
　1 発掘前の状況 …… 7
　2 墳丘並びに周溝状遺構 …… 7
　3 埋葬施設１ …… 11
　4 埋葬施設２ …… 14
　5 埋葬施設３ …… 19
　6 埋葬施設４ …… 19
Ⅳ　結　語 …… （増　田・木野本） 25
　1 出土遺物について …… 25
　2 埋葬施設について …… 26
付編　南山ノ奥６号墳から出土した赤色顔料の種類　パリノ・サーヴェイ株式会社 …… 28

挿　図　目　次

第１図　南山ノ奥６号墳周辺の遺跡 … 3
第２図　遺跡周辺地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 6
第４図　墳丘土層断面図 …… 7
第５図　調査前測量図 …… 8
第６図　調査後測量図 …… 9
第７図　埋葬施設位置図 …… 10
第８図　墳丘盛土内ほか出土遺物 …… 11
第９図　埋葬施設１掘形出土遺物 …… 11
第10図　埋葬施設１土層断面図 …… 12
第11図　埋葬施設１平面図・立面図 … 13
第12図　埋葬施設１棺南小口土器出土状況 …… 14
第13図　埋葬施設１棺南小口出土遺物 …… 15
第14図　埋葬施設１棺内出土遺物 …… 16
第15図　埋葬施設２平面図・立面図・土層断面図 …… 17
第16図　埋葬施設３平面図・立面図・土層断面図 …… 18
第17図　埋葬施設２棺内刀子出土状況 …… 19
第18図　埋葬施設３掘形出土遺物 …… 19
第19図　埋葬施設４平面図・立面図・土層断面図 …… 20
第20図　埋葬施設４棺北小口土器出土状況 …… 20
第21図　埋葬施設４棺北小口出土遺物 …… 21
第22図　埋葬施設４棺内出土遺物 …… 22
第23図　南山ノ奥６号墳出土赤色顔料のＸ線回折図 …… 29

表　目　次

第１表　出土土器観察表(1) …… 23
第２表　出土土器観察表(2) …… 24

図　版　目　次

図版１　作業風景・調査風景・現地説明会 …… 30
図版２　北上空からの南山ノ奥６号墳・調査区全景 …… 31
図版３　調査前風景・表土除去後風景・埋葬施設１検出状況ほか …… 32
図版４　埋葬施設１・遺物出土状況 …… 33
図版５　埋葬施設２・埋葬施設３ …… 34
図版６　埋葬施設４・遺物出土状況 …… 35
図版７　埋葬施設１棺南小口・埋葬施設４棺北小口出土遺物 …… 36
図版８　墳丘盛土内ほか出土遺物 …… 37
図版９　埋葬施設１・４出土鉄製品 …… 38

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

三重県教育委員会では、国および県にかかる各種公共事業に関連して、事業地内の文化財の確認と、その保護に努めてきているところである。

今年度施行されることとなった農林漁業用揮発油税身替財源農道整備事業（上野南部２期地区）については、当センターおよび三重県教育委員会文化芸術課（現・生涯学習課）が行っている埋蔵文化財の事前の保護協議を行う各種公共事業照会（平成９年度実施分）において、平成10年度事業として回答があったものである。今回の事業地は、「上野市遺跡地図」[1]において南山古墳群（市遺跡番号677～682）として埋蔵文化財包蔵地の登録を行っている遺跡範囲を含み、６号墳と隣接する仮称７号墳が今回の事業地内に該当することが判明した。

三重県埋蔵文化財センターでは、事業地内の埋蔵文化財の実態を確認するため、平成９年12月３日に当センター主査兼係長清水正明を担当者として試掘調査を実施した。その結果、７号墳については遺構が確認されず、盛土であることが判明したが[2]、６号墳については遺構・遺物が確認された。

この結果をもとに当センターおよび文化芸術課では、県農林水産部と埋蔵文化財保護協議を重ねてきた。しかし、工法上保存が不可能である法面部分の100㎡を記録保存するということで合意した。

2　調査の経過

a　調査経過概要

発掘調査は、担当者として当センター主事木野本和之のほか、調査協力員として上野市教育委員会から増田博が参加した。なお、調査期間中は上野市教育委員会から多大なご協力を得たことを明記する。

調査地は、丘陵頂部にあることから、全て人力による掘削となった。特に、墳丘上の松・檜を中心とした切株の抜根作業には大変手を焼いた。埋葬施設は、遺存状態が良好なものが４基も確認され、掘削に伴う土量も予想以上に多かった。また、遺物もまとまって確認され、通常の調査活動以外に現場での遺物の保存に頭を悩ませることとなった。

調査期間中は、ちょうど梅雨末期と重なり、蒸し暑い中での作業となった。また、調査地は麓からの比高差約18mの丘陵上にあり、往復の道は大変険しく、肉体的な疲労の溜まりやすい調査であったと思う。しかし、作業員のみなさんの暖かいご配慮と熱心な意欲に後押しされ、無事に調査を終了することが出来た。ここにご芳名を記し、心から感謝の意を表したい。

東完浩、小川博司、川本恵津子、岸森千賀子、澤野禎男、杉森忠雄、中西義朝、濱潔、廣岡一巌、廣岡律子、藤森みち、山本正巳、（敬称略）

b　調査日誌（抄）

７月１日　レベル移動（竹内・木野本・増田）。

２日　作業員本日から。現場までの登山道を造る。調査前地形測量開始（竹内・木野本・増田・船越・濱辺）。

３日　調査前写真撮影。表土除去作業開始。

６日　Ⅱ区より中～近世の土師器皿、Ⅳ区より須恵器壺片が出土。午後、写真撮影。

７日　埋葬施設１の検出作業開始。伊賀上野ＣＡＴＶの取材。訪問者の多い一日。

９日　埋葬施設１検出作業。

10日　埋葬施設１を掘り下げ、棺の検出開始。南端で須恵器杯身・蓋と粘土塊を確認。

13日　さらに須恵器高杯、土師器壺を確認。東西に２列に並ぶ。出土状況写真撮影。

14日　木棺痕跡掘り下げ。須恵器甕、鉄製品のほかに人骨片を確認。ＣＡＴＶ取材。

15日　埋葬施設２の検出作業開始。南側は攪乱で破壊されている。埋葬施設１全景写真撮影。雨に備えて埋葬施設１に屋根を作る。

21日　鉄製品の検出作業。個別写真撮影。

22日　埋葬施設１の実測開始。ＣＡＴＶ取材。

23日　埋葬施設２の掘削作業開始。

28日　調査区を少し拡張したところ、表土直下から土器・鉄製品が出土し、埋葬施設４を確認。

29日　埋葬施設４土器群の検出後、写真撮影。

30日　埋葬施設２の木棺痕跡を検出。木棺内より刀子出土。

8月3日　埋葬施設3の検出作業。埋葬施設4の掘削作業。埋葬施設1及び埋葬施設4の実測（原田・船越）。～7日

6日　ラジコンヘリで空撮実施。上野市役所でマスコミへの資料提供（竹内・木野本）。

7日　埋葬施設4の鉄製品取り上げ。

8日　現地説明会開催。210名の参加者。

10日　埋葬施設1の鉄製品取り上げ（増田・竹内・船越・萩原・杉崎・瀬野）。～11日　埋葬施設2・4の実測。

11日　埋葬施設3掘方掘削。木棺底から人骨・歯が出土。

13日　調査後墳丘測量開始（増田・木野本）。

17日　墳丘測量終了。

18日　周溝埋土の土層断面実測。道具類の撤収作業。現地での調査が全て終了。

c　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成10年6月18日付賀農第551号（県知事通知）
・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成10年6月19日付教生第585号（県教育長報告）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（上野警察署長あて）
平成10年10月6日付け教生第8-19号（県教育長通知）

3　調査の方法

a　掘削について

墳丘上に堆積していた表土のほか各主体部埋土等については、すべて人力掘削によって除去した。

b　小地区設定について

試掘調査時点で、墳丘は試掘時のトレンチによってほぼ4分割されていた。今回の調査では、便宜上このトレンチによって分割された部分を、北西隅から時計回りにローマ数字のⅠ～Ⅳを割当て、小地区の符号とした。なお、この小地区設定は国土座標軸とは無関係である。

c　遺構図面について

調査区の平面図（調査前測量図・調査後測量図）は、平板測量により1/100でコンタ図を作成した。また、主体部等の遺構については基本的に1/20の実測図を作成したが、埋葬施設1・4のように副葬品などの出土遺物を伴うものについては、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

4　遺跡の名称について

当遺跡は、前述の通り「南山古墳群」として示されている。しかし、当遺跡が所在する小字名は「南山ノ奥」であり、遺跡名には小字名を冠する原則からは外れていた。また、「南山」の地名を冠する古墳は、既に三重県内の他市町村に存在し、混乱を招く恐れがあると考えられた[3]。そのため、今回の発掘調査を契機として、従来の遺跡名を変更し「南山ノ奥古墳群」と呼称することとした。したがって、今回調査した6号墳も、本報告書からは「南山ノ奥6号墳」と改称し、以後これを正式の名称として使用する。

〈註〉

1　「三重県　上野市遺跡地図」（上野市教育委員会　1992）

2　仮称7号墳は、1994（平成6）年に実施した分布調査の際、6号墳の隣接地で確認された古墳状の高まりである。後日の取材で、この高まりは終戦直後の盛土であることが判明した。

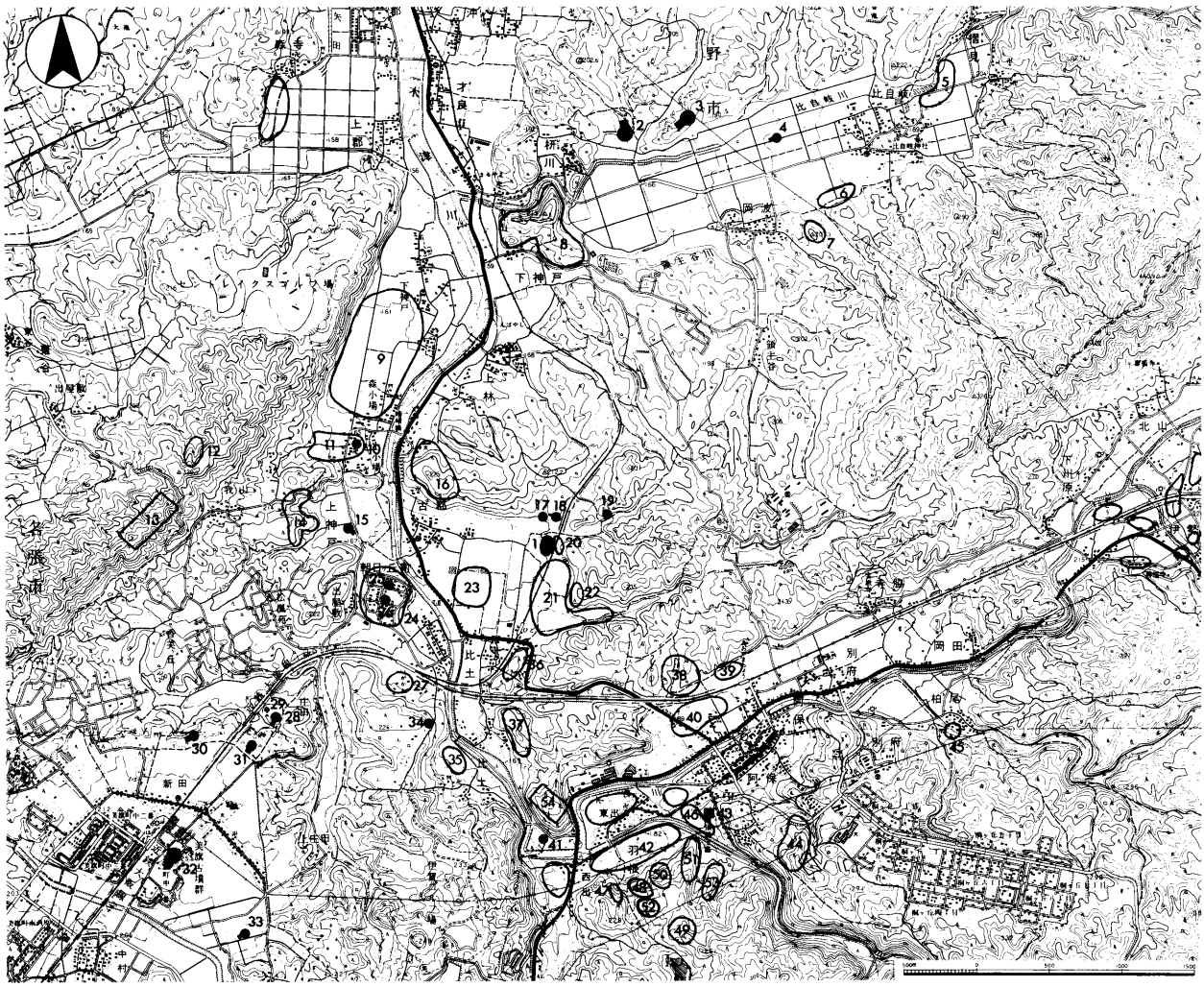
3　確認したところ、県内で「南山」の地名を冠する古墳は伊勢市及び鈴鹿市に所在する。そのうち鈴鹿市のものについては、全く同名の「南山6号墳」である。1987（昭和62）年に発掘調査が実施され報告書（新田剛「南山遺跡・南山6号墳」鈴鹿市教育委員会　1991）も刊行されている。

Ⅱ　位置と歴史的環境

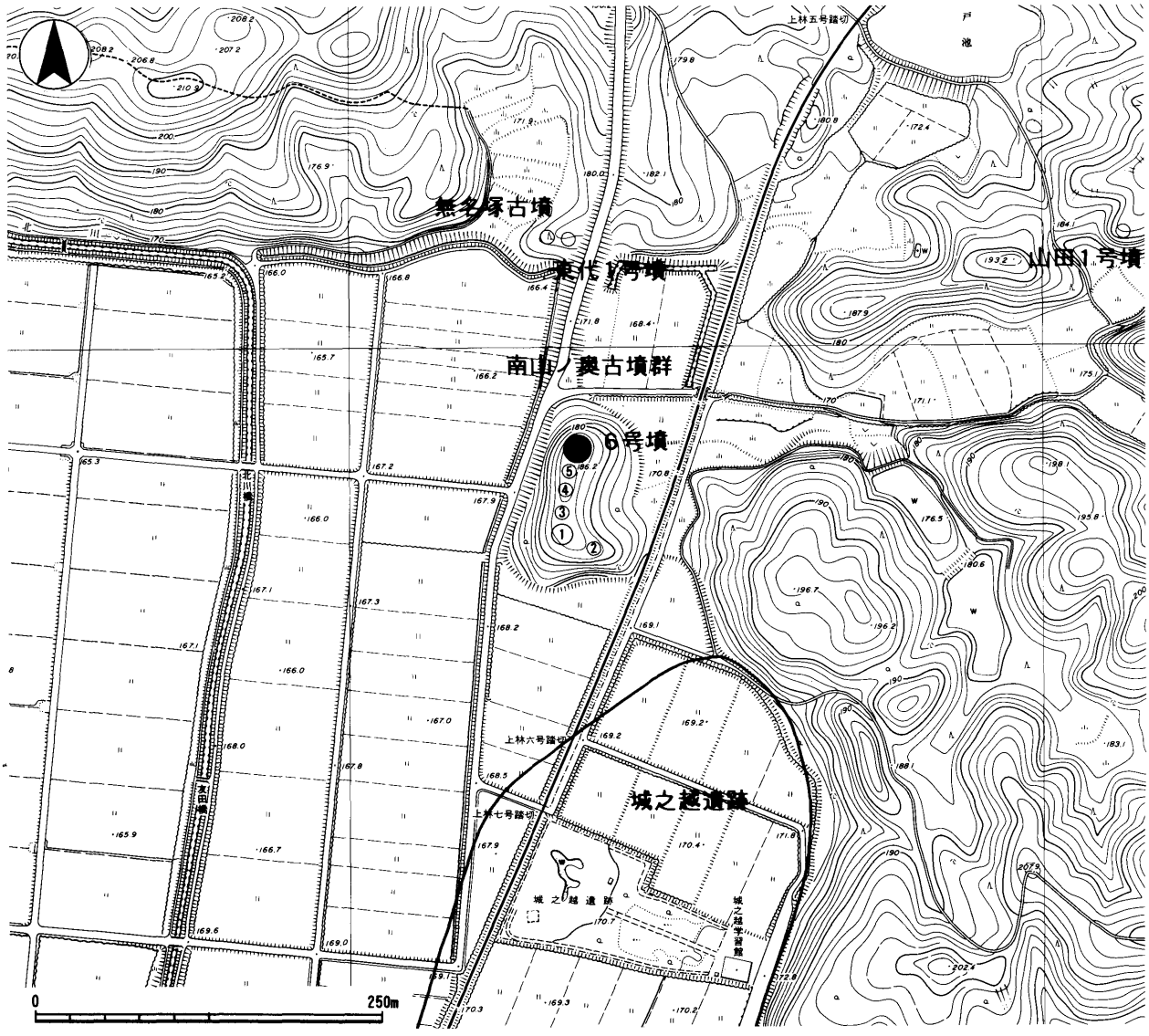
南山ノ奥古墳群(1)は三重県上野市古郡字南山ノ奥に所在する。上野市は県北西部に位置し、四方を山々で囲まれた盆地地形の伊賀地域に属する。伊賀地域は水系から南部の名張盆地と北部の上野盆地に大別できる。上野盆地内には南東の青山町に源を発する木津川、東の大山田村に源を発する服部川、北東の伊賀町に源を発する柘植川の３河川が流れており、これら３河川は盆地北西端で合流し、また、名張盆地を流れる名張川とも京都府相楽郡内で合流し、京都府・大阪府を通って淀川となって大阪湾に注いでいる。他の三重県内の河川は全て伊勢湾に注いでおり、水系からも伊賀地域が近畿地方と深く関わっていることが理解できる。木津川水系についてみると、上流部は地形からいくつかの小盆地に分けることができる。上流から、阿保、比土・古郡、下神戸、支流の比自岐の小盆地があり、その後は上野盆地中央部の沖積地が続く。南山ノ奥古墳群は比土・古郡小盆地北東部の独立丘陵上に位置し、現在円墳６基が確認されており、標高は約188mである。

周囲の遺跡をみてみると、比土遺跡(27)において旧石器時代のサヌカイト製翼状剥片が出土している[1]。また、奥城寺遺跡(24)からも旧石器時代から縄文時代相当のサヌカイト製の剥片が出土している。

縄文時代のものは、東代遺跡(20)で石斧が出土している、また、土器では、花代遺跡(46)[2]、中出向遺跡(42)[3]において早期の押型文が確認され、奥城寺遺跡、城之越遺跡(21)[4]、稲田遺跡(23)、高瀬遺跡(35)[5]においても小片が出土しており、近年遺跡



第１図　南山ノ奥６号墳周辺の遺跡　1:50,000（国土地理院1:25,000『伊勢路』『阿保』より）



第２図　遺跡周辺地形図　1:5,000（上野市都市計画図1:2,500より）

数は増加している。しかし、未だ遺構は確認されていない。

弥生時代では、比土遺跡において前期の遠賀川式の甕、奥城寺遺跡でも壺が出土しているが、前期・中期の遺構は見つかっていない。後期になると青山町柏尾(45)、比土遺跡から突線紐式の銅鐸が出土しており[6]、楳ケ森遺跡(39)において溝から多量の弥生土器が出土し[7]、浮田遺跡(9)においても古墳時代にかけて方形周溝墓が造られている[8]。

古墳時代になると、沢代遺跡(40)[9]、高瀬遺跡、花代遺跡において前期から中期にかけての集落が造られ、高瀬遺跡、花代遺跡からは、初期須恵器が出土している。また、城之越遺跡では水の祭祀に関わる大溝・大型掘立柱建物が検出され、国の名勝及び史跡に指定されている。高賀遺跡(11)においても、大溝から前期から中期の遺物が出土しており、近くの台地上に集落の存在した可能性が指摘されており[10]、馬場西遺跡(6)においても中期以降の集落跡が確認されている[11]。

付近の古墳で最も時期が上るものは、豊富な石製品の出土で知られる前方後円墳の石山古墳(3)である[12]。比土・古郡小盆地南西の名張市美旗の台地上には、殿塚(28)がやや遅れて造られ、その陪塚であるワキ塚１号墳(29)からは革綴の冑・鎧などの多くの鉄製品が出土している[13]。また、周囲には女良塚(31)・毘沙門塚(30)・馬塚(32)・貴人塚(33)と、首長墓が引き続き築造される[14]。小盆地内では、甲冑・円筒埴輪等の出土が知られる帆立貝形古墳の近代古墳(15)[15]、獣

形鏡や玉類の出土が知られている中出八王子社古墳（10）が所在し、大師山古墳群（16）、早山古墳群(37)、来迎寺古墳群(36)等で埴輪をもった古墳の存在が知られている。これ以外にも、王塚古墳（4）において赤・白・緑の顔料で彩色された人物埴輪片[16]、伝息速別命墓(43)から須恵質のものを含む円筒埴輪が出土しており、才良山1号墳(2)、石塚古墳群(7)においても円筒埴輪の出土が知られている。

後期には盆地周辺部の丘陵にいくつかの小規模な古墳群が造られる。木津川右岸では、南山ノ奥古墳群の他にも、城之越古墳群(22)、無名塚古墳(41)、東代1号墳(18)、山田1号墳(19)、大師山古墳群が所在し、中には横穴式石室が露見しているものもある。また、南山ノ奥古墳群に隣接する城之越遺跡では、この時期の集落跡が確認されている。木津川左岸では奥城寺遺跡において住居跡が確認され、横穴式石室をもつ奥城寺1号墳(25)と竪穴系横口式石室をもつ奥城寺2号墳(26)が調査されている[17]ほか、狭戸古墳群(14)、六つ子塚古墳群(12)等横穴式石室のものを含む古墳群が存在する。また、清水谷2号墳(34)からは須恵質の陶棺片が出土している。木津川上流の阿保小盆地では、七ケ城古墳群（38）において、6世紀中頃の木棺直葬墓2基と7世紀に入る小石室1基が確認されており[18]、塚原古墳(41)は6世紀後半築造の横穴式石室をもつ円墳で、7世紀初頭に追葬が行われている[19]。また、桐ケ谷古墳群(44)内で調査された桐ケ谷15号墳においても、6世紀中頃築造の横穴式石室が検出され、6世紀後半の3度の追葬が想定されている[20]。集落跡では、中出向遺跡において70棟以上の竪穴住居群が検出され、遺跡の南側の丘陵に所在する下向古墳群（47）、中出向古墳群(48)、峯台古墳群(52)、峯台東古墳群(49)、間処古墳群(50)、狐塚古墳群(51)、深谷古墳群(53)等の古墳群との関連が想定されている。

飛鳥・奈良時代に入ると、この地方は伊賀4郡の内の伊賀郡に属するが、当地の古郡という地名の由来には、伊賀郡の郡衙の存在が想定されている[21]。この時期の集落遺跡としては、沢代遺跡・七ケ城遺跡(38)・楳ケ森遺跡、比土遺跡、城之越遺跡、浮田遺跡・高賀遺跡、馬場西遺跡があげられる。

平安時代には荘園化が進み、10世紀末から11世紀にかけては古郡に拠点を置いたと考えられている藤原清簾・実遠親子がこの地域の大部分を私営田として経営した[22]。その後、伊勢神宮領として多くは引き継がれる。この時期の遺跡としては、城之越遺跡、浮田遺跡、馬場西遺跡、上寺遺跡(5)があげられる。

中世に入ると、この地域にも多数の城館が築かれる。木津川右岸の突き出た崖上には4郭からなる城山堡跡(54)が存在し、我山城跡(13)は『伊水温故』に北畠具親が伊賀兵乱まで蟄居したと伝えられている城で[23]、山頂には多数の曲輪が存在する。また、丸山城(8)は北畠信雄が家臣の滝川三郎兵衛に命じて造らせた県内でも最大規模のもので、完成間近に伊賀の土豪の攻撃で落城した。

（註）

1　増田博・舘邦典「比土遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会　1997

2　『平成9年度三重県埋蔵文化財年報』1998

3　註2に同じ

4　穂積裕昌他『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1992

5　服部芳人「三重県・高瀬遺跡」(『考古学ジャーナル289』ニューサイエンス社　1988)

6　梅原末治『銅鐸の研究　資料篇』木耳社　1985再版

7　境宏・前川友秀他『七ケ城遺跡　七ケ城古墳群楳ケ森遺跡調査報告書』青山町教育委員会・青山町遺跡調査会　1995

8　森川常厚・穂積裕昌他「上野市上神戸　浮田・高賀遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1991)

9　境宏他『沢代遺跡調査報告』青山町教育委員会・青山町遺跡調査会　1995

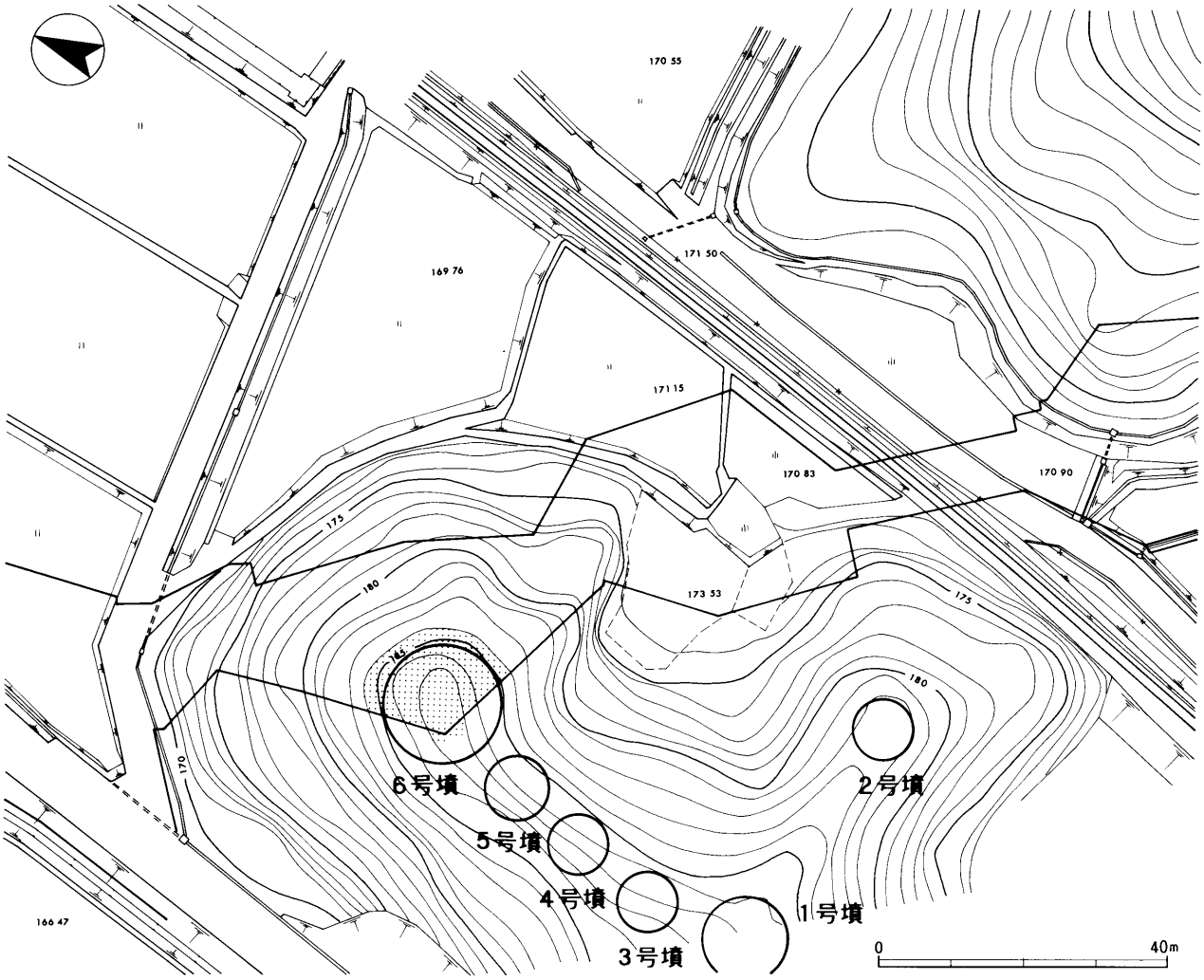
10　註8に同じ。

11　山田猛「上野市比自岐馬場西遺跡」(『昭和52年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告2』三重県教育委員会　1978)

12　『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第6冊　1993

13　森浩一他「三重県わき塚古墳の調査」(『古代学

研究66』古代学研究会　1973)
14　山本雅靖「古墳時代首長墓の系列的築造と地域構造－伊賀地域における－」(『三重県史研究』第３号　1987)
15　仁保晋作「近代古墳」(『三重県埋蔵文化財年報17』三重県教育委員会　1987)
16　山田猛「上野市岡波　王塚古墳」三重県教育委員会　1979
17　福田典明「上野市内埴輪出土古墳一覧」(『上野市埋蔵文化財ニュースNO５』上野市教育委員会　1994)
18　註７に同じ
19　仁保晋作『塚原古墳発掘調査報告』青山町教育委員会　1982
20　門田了三『青山町阿保　桐ケ谷15号墳』青山町遺跡調査会　1986
21　久保文雄他『三重県の地名』平凡社　1983
22　例えば久保文武他『図説伊賀の歴史　上巻』郷土出版社　1992
23　福井健二他『伊賀の中世城館』伊賀中世城館調査会　1997



第３図　調査区位置図　1:1,000

Ⅲ　調査の成果　－遺構と遺物－

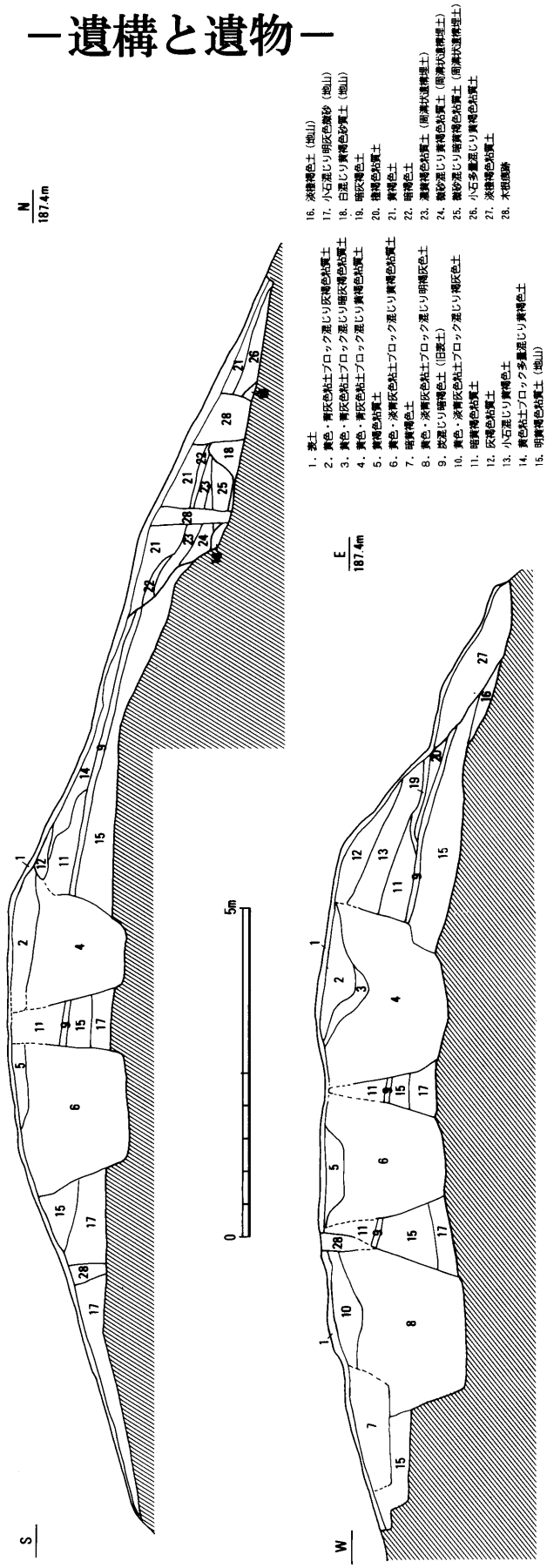
1．発掘調査前の状況

南山ノ奥古墳群は、比土小盆地北東隅の独立丘陵上に造られた古墳群で、現在のところ尾根上に円墳６基の存在が確認されている。過去に調査は行われておらず、今回の６号墳の調査が初の調査となった。古墳が所在する尾根は、南北方向に約150m、南端で東に僅かに曲がる「Ｌ字」状の地形をしており、南北方向の尾根上には５基、東に曲がった部分には１基の古墳が所在する。尾根は北側にいくほど標高が高く、北端に位置する今回調査を行った６号墳の墳頂部が最も高くて標高約188m、北側の水田からの比高は約18mを測る。古墳の規模は、南北方向の尾根の両端に所在する１号墳と６号墳が他に比べて大きく、その他の古墳は直径10mに満たない規模のものである。

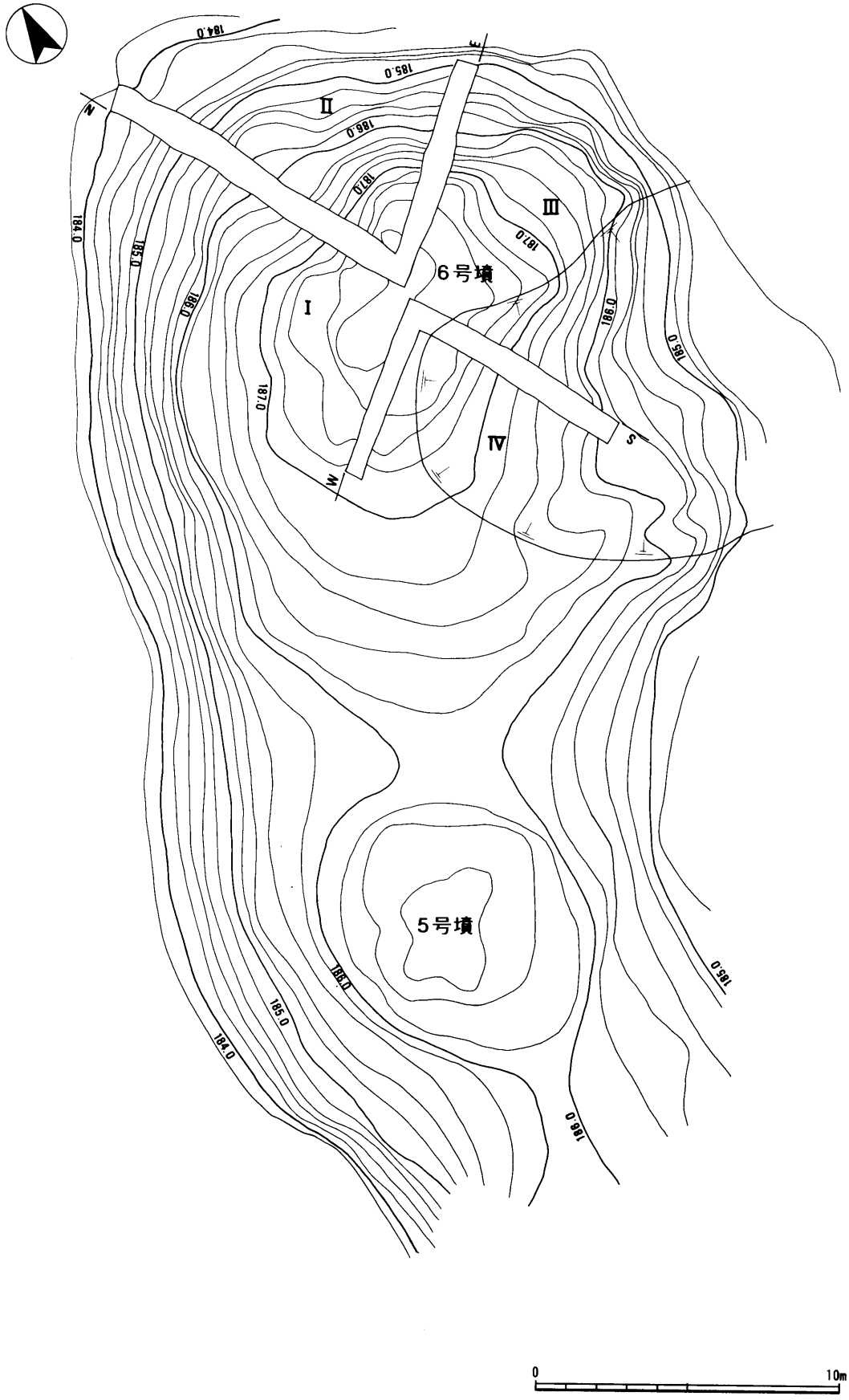
６号墳の調査前の状況は雑木林であった。墳頂部には尾根方向に長さ約８m、幅約４mの楕円形の平坦面が見られた。南側の５号墳との境は幅約２m程度の窪んだ地形が存在し、尾根を切った痕跡と考えられた。他の三方は急な傾斜地で墳丘の裾部を明瞭に判断することは困難であった。また、南東部には過去に開墾された畑の痕跡が段状地形として残っており、この部分の墳丘は土取りされ、やや抉れたいびつな形状を呈していた。

2．墳丘並びに周溝状遺構

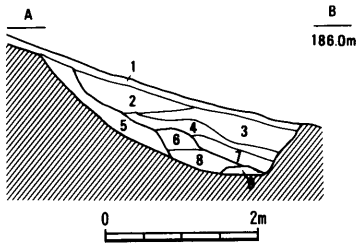
調査は、墳丘の北東側約２/３の範囲について実施し、５号墳との境をなす南西部分は未調査である。調査の結果、墳頂部で現地表下90cmのところで古墳が造られる以前の旧表土（炭混じり暗褐色土）が確認され、これより上部は盛土され古墳が造られていることが判明した。また、北側と東側ではこの層を切り込んで墳丘を形成していることが確認された。墳頂部の南側では過去に盗掘されていることが判明し、調査前から確認できた南東部の土取りの痕跡は比較的広範囲であることが判明した。以上のことから、墳形については憶測の域を出ないところであるが、現時点では南北方向約23m、東西方向約20mの南北方向に長い楕円状の円墳と考える。ただし、将



第４図　墳丘土層断面図　1:100

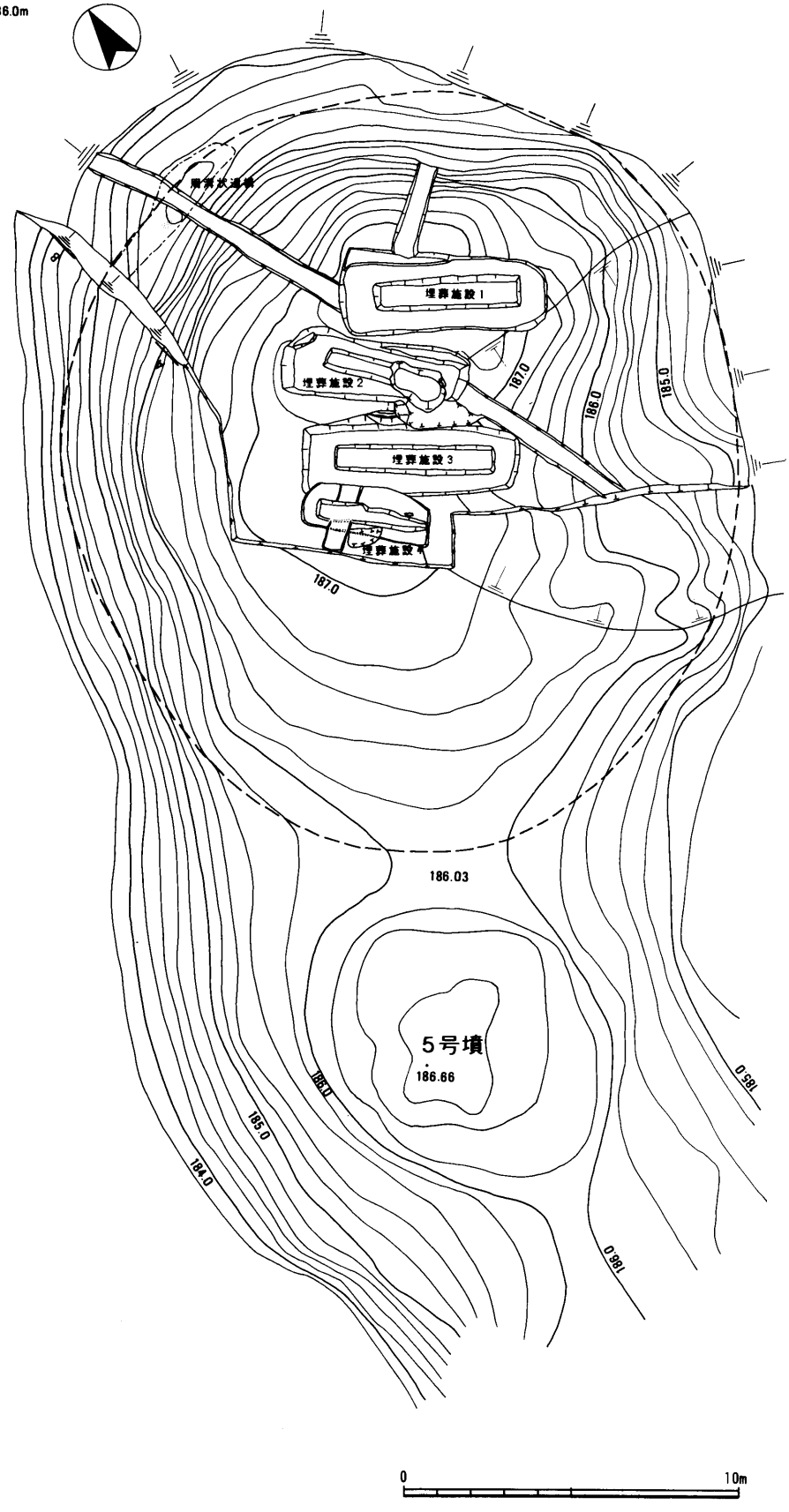


第５図　調査前測量図　1:200

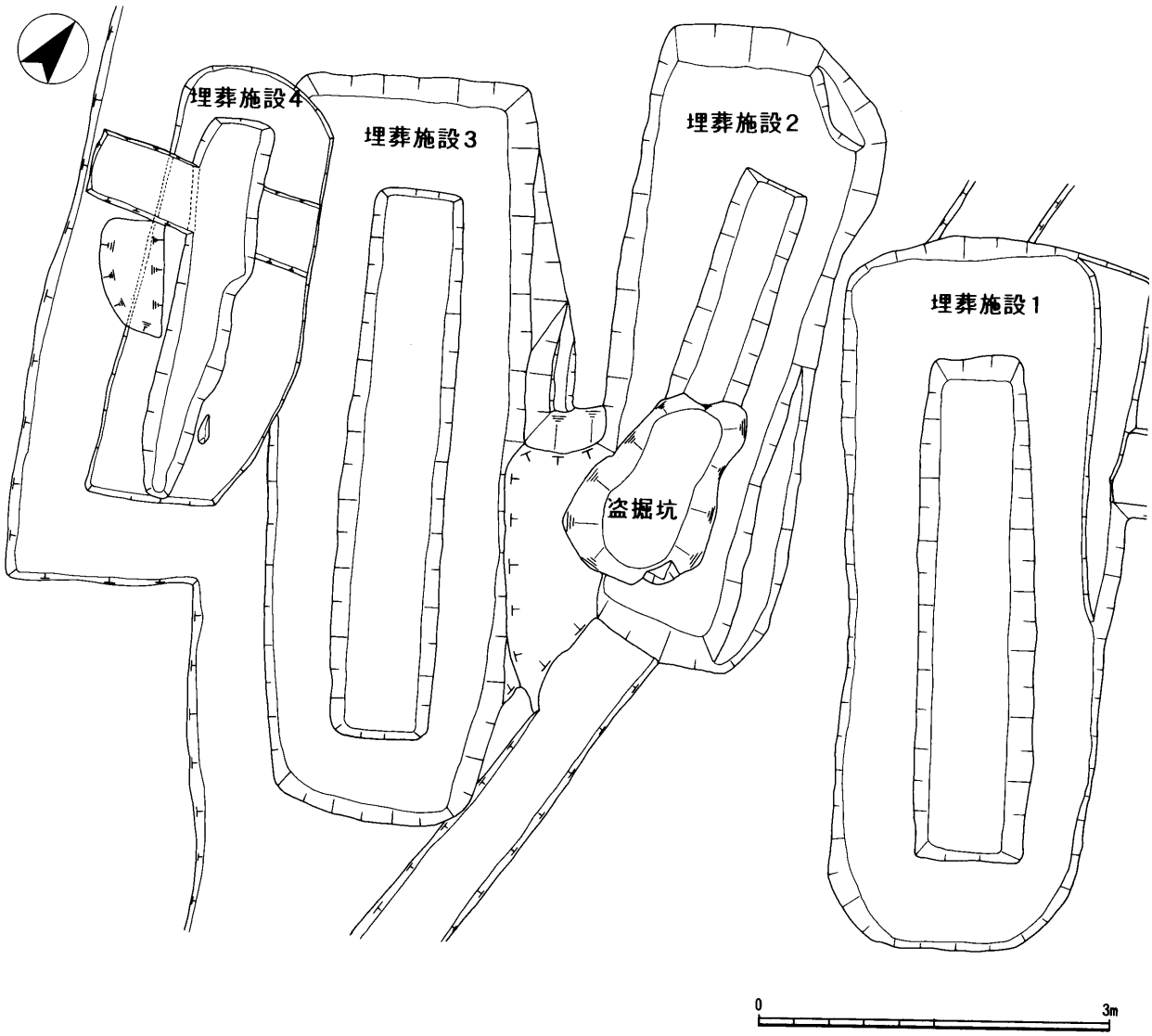


1．表土
2．黄褐色土
3．暗黄褐色土
4．暗褐色土
5．微砂混じり黄褐色土
6．微砂混じり黄褐色粘質土
7．微砂混じり暗黄褐色粘質土
8．微砂混じり明黄褐色粘質土
9．白混じり黄褐色砂質土

周溝状遺構土層断面図 1:100



第６図　調査後測量図　1:200



第７図　埋葬施設位置図　1:60

来南西部分の調査が実施された場合、南西側に造出しをもつ直径20m程度の円墳である可能性も残る。また、埋葬施設は並んで４基確認されたが、南西部が未調査であるため、調査区外にまだ数基存在する可能性もある。

北側の墳丘裾部に、最大部で幅約1.3m、深さ約60cmの規模の周溝状遺構が確認された。墳丘の東側にまでは巡っておらず、遺構の東端で墳丘は僅かに平坦部を造っている。西方向は調査区外に延びており、西側に向かって傾斜している。埋土からは遺物が確認されなかったものの、東端の平坦部に完形の土師器椀や比較的残りの良い須恵器蓋杯が出土した。この遺構が周溝であった場合、周溝は古墳の西側のみに設けられていたものと考えられる。また、周溝でないとするなら、この遺構が傾斜しながら下っていることから、南から続く墓道である可能性も考えられる。

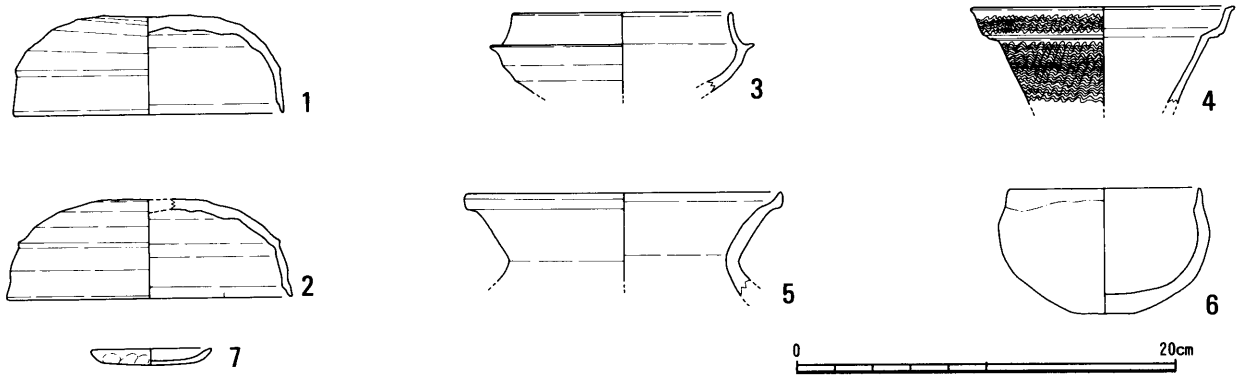
墳丘出土の遺物

出土遺物の多くは土師器・須恵器の小片であるが、前述したように墳丘裾部の周溝状遺構の東隣の僅かな平坦部で遺物がまとまって出土した。また、１点のみであるが近世の土師器皿が出土しており、盗掘に関わる遺物であることも考えられる。

須恵器杯蓋(1・2)　２点とも周溝状遺構東隣の僅かな平坦部でまとまって出土した。稜を有し、口縁端部は段状の面を呈するものである。

須恵器杯身(3)　推定口径11.4cmの小型のもので、たちあがりは直立気味で比較的長いものの、口縁端部は丸くおさめる。

須恵器瓶(4)　口頸部のみの残存である。口縁部は



第８図　墳丘盛土内ほか出土遺物　1:4

短く、外面には一面に細かな波状文を施す。

須恵器壺(5)　口縁部のみの残存である。装飾を施さず、上外方へ真っ直ぐ延びる口縁で、端部は外側に肥厚し、内側は僅かにつままれる。

土師器椀(6)　(1)・(2)とともに周溝状遺構脇から、うつぶせ状態で出土した。球形の体部。口縁部は僅かに内傾し、端部は尖り気味で内側に面をつくる。内面及び口縁端部外面に煤が付着しており、ややいびつな形状である。

表土除去中出土遺物

土師器皿(7)　墳丘の斜面上から出土した土師器小皿の小片である。指オサエのみで作られた近世のものと考えられる。

３．埋葬施設１

最も東側で検出した埋葬施設である。掘形の平面形は幅2.1m、長さ6.1mの隅丸方形であるが、北東隅から東側に幅45cm張り出す三角形のステップ状施設をもつ。最深部で地表からの深さは2.0m、ステップ状施設までは約1.4mであるが、南側では埋土はほとんどなくなっていた。棺痕跡は方位N56°Wで、掘形のほぼ中央に幅1.0m、長さ4.3m、検出面からの深さ55cmの断面半円形の割り竹形のものが確認された。両小口には粘土塊が据えられ、南小口では棺内にも見られるが、これは棺が朽ちた際に壺に押されて入りこんだものと考えられる。棺内は一面に赤色顔料がまかれていたが、特に北側の矢付近と南側の鉄製品が集中するあたりが他に比べて厚くまかれていた。また、南小口から約1.5mの地点の赤色顔料の中から背骨と考えられる骨片が出土している。

遺体は頭部を南に向け、農工具がおかれた北側あたりから矢までの間におさめられていたものと考えられる。

埋葬施設１出土の遺物

遺物は掘形埋土、棺南小口、棺内の３か所から出土した。掘形埋土からは土師器片・須恵器片が数点出土したのみである。棺南小口からは完形の須恵器・土師器が16点まとまって出土した。棺内からは農工具・武具等の鉄製品、骨片が出土した。

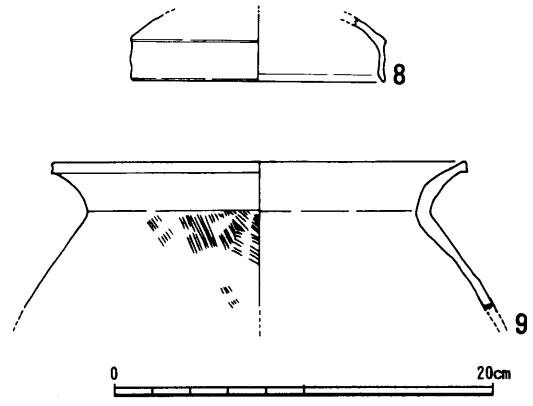
掘形出土遺物

須恵器杯蓋(8)　口縁部のみの小片である。僅かに稜を有し、端部は段状の面を呈する。

土師器甕(9)　口縁部付近の小片である。口縁部は外反し、端部は外側に面をつくる。

棺南小口出土遺物

須恵器蓋杯４セット・有蓋高杯１セット・高杯２・鼓１・壺１、土師器壺２の計16点の完形の土器ががまとまって出土した。須恵器蓋杯は全て蓋を杯



第９図　埋葬施設１掘形出土遺物　1:4

の下にあてがい、有蓋高杯も蓋があけられ、蓋は蓋杯の上に載せられていた。高杯は１点が伏せられ、もう１点は横に倒した状態で、土師器壺は２点とも正位で置かれていた。須恵器壺は正位に置かれていたものが棺が朽ちた際に棺側へ倒れこみ、その際に須恵器瑞も棺内へ入りこんだものと考えられる。

須恵器杯蓋(10･12･14･16)　口径15.2～16.0cm、器高4.2～4.6cmと法量はほぼ等しく、形状は４点とも稜をもち、口縁端部は内面に段状の面をもっており、類似している。

須恵器杯身(11･13･15･17)　受部径は16.0～16.7cmとほぼ法量は等しい。口縁端部も４点とも内面に段状の面をもつ。

須恵器有蓋高杯蓋(8)　扁平なつまみを付し、天井部はカキメを施す。口縁端部は僅かに外方につままれる。

須恵器有蓋高杯(9)　長脚で、方形透かしを３方にあける。杯底部から脚部にカキメを施す。

須恵器高杯(20･21)　２点とも器高が等しくよく似た形状のものである。杯部に波状文、脚部にカキメを施す。21のカキメが杯底部におよぶのに対して、20の杯底部はケズリのみで仕上げている。

須恵器瑞(22)　口頸部と体部の長さがほぼ等しく、頸部に細かな波状文を一面に施し、体部にはカキメを施す。孔の周りに使用時のものと考えられる痕跡が見られる。

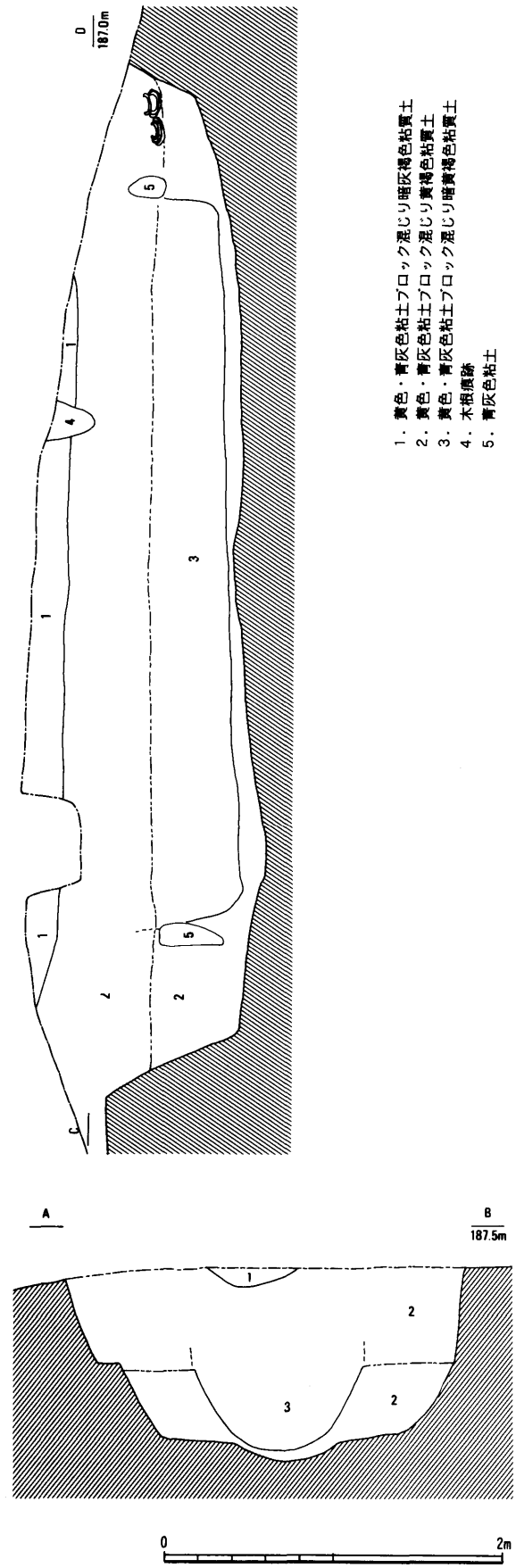
須恵器壺(23)　口縁部はラッパ状に開き、２段に波状文を施す。底部は球形を呈する。

土師器壺(24･25)　24は底部に平坦面をもち体部は肩の張った形状で、口縁部は屈曲して短く上外方にのびる。外面には赤色顔料が見られる。25は胎土が水簸したように緻密で、器壁は非常に薄く仕上げられている。やや扁平な体部を有し、口縁部は外反気味に延び端部は尖る。　（増田　博）

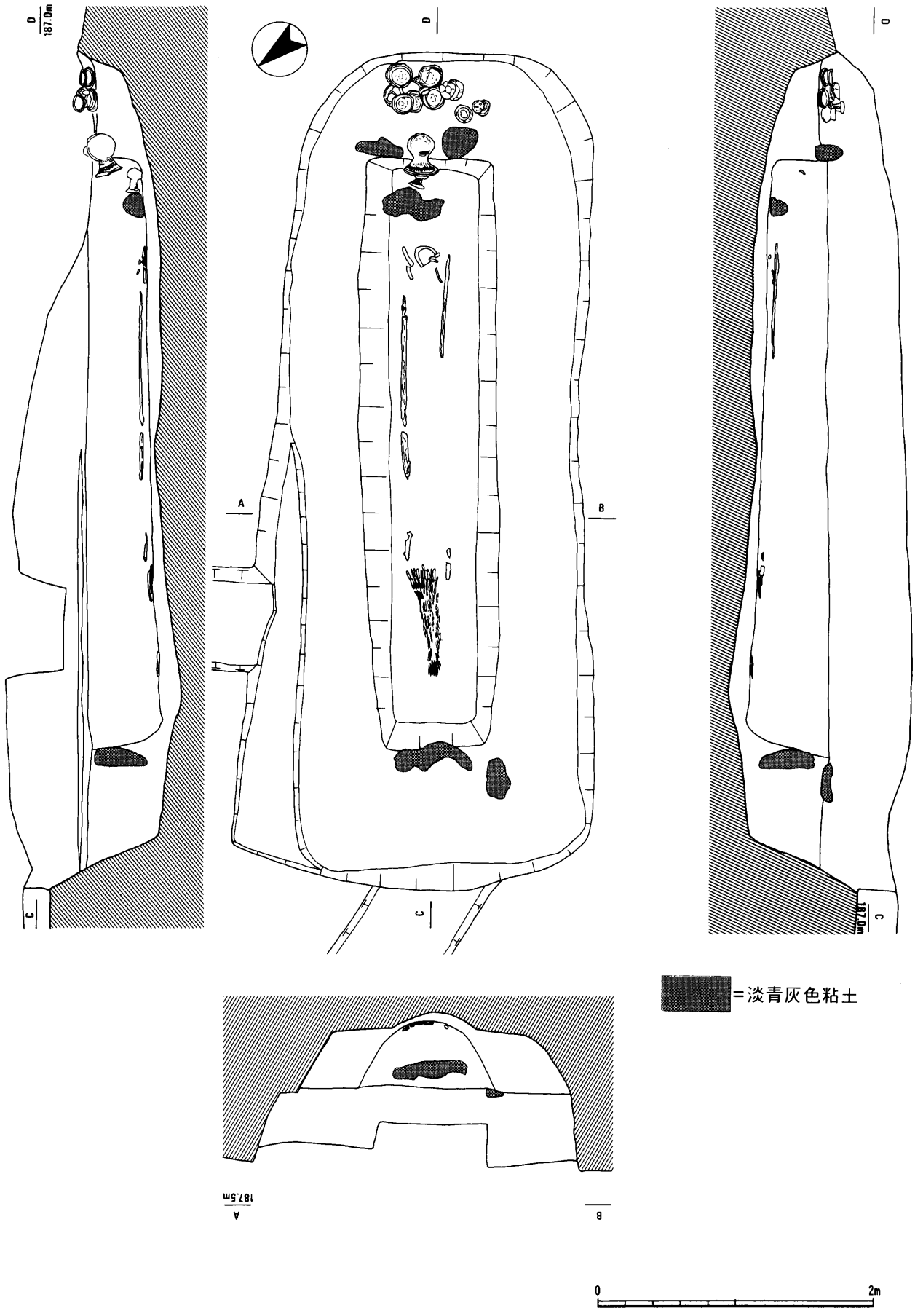
棺内出土遺物

鎌(26)　残存長14.7cm、最大幅2.7cm，厚さ約３mm。付け根から約10cmで、「く」の字状に屈曲する。先端部を欠くが、付け根部分には木質が縦方向に残っており、柄を装着した状態で供えられたものと思われる。

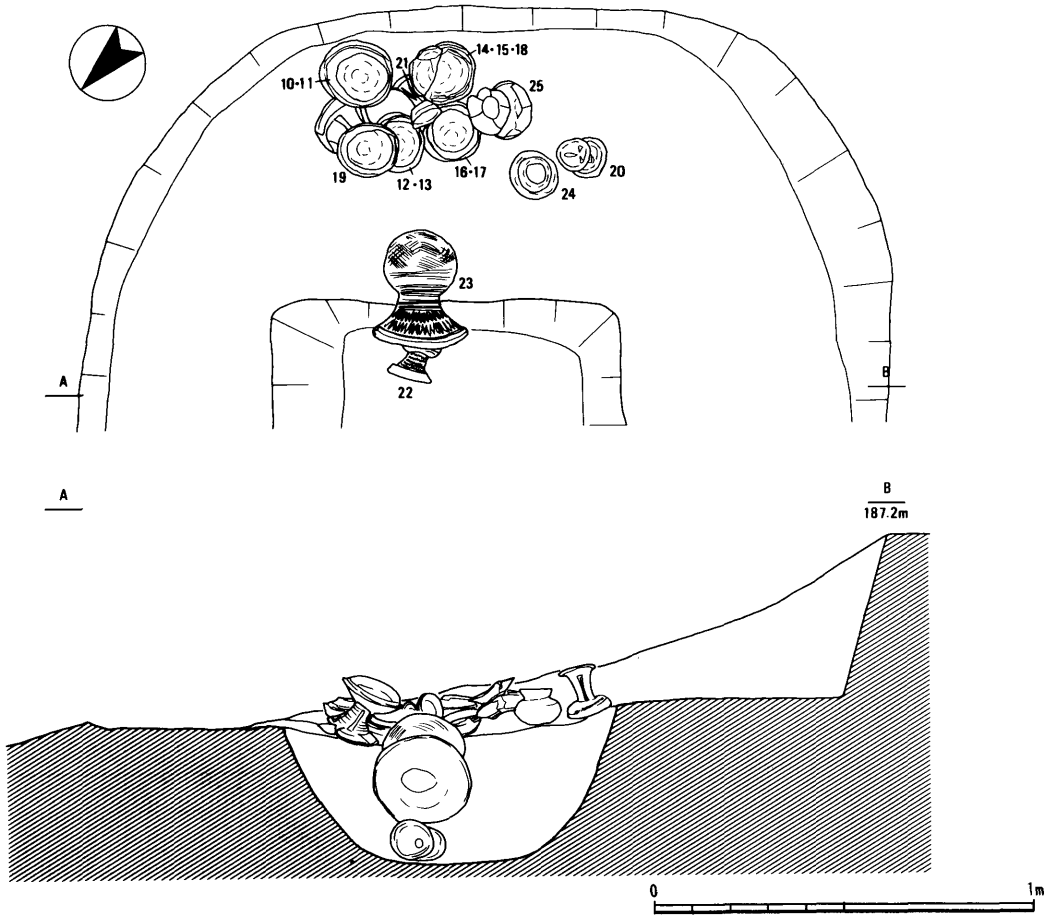
斧(27)　残存長10.7cm、最大幅3.5cm。付け根部分



第10図　埋葬施設１土層断面図　1:40



第11図　埋葬施設１平面図・立面図　1:40



第12図　埋葬施設１棺南小口土器出土状況　1:20

を欠くが、縦方向に木質が残る袋状の中空部分がある。この部分は、薄い板状の鉄を両側から柄に巻き込んで装着しており、裏面に合わせ目が残る。下部は細くなり、付け根のおよそ半分の厚みで刃部につながる。

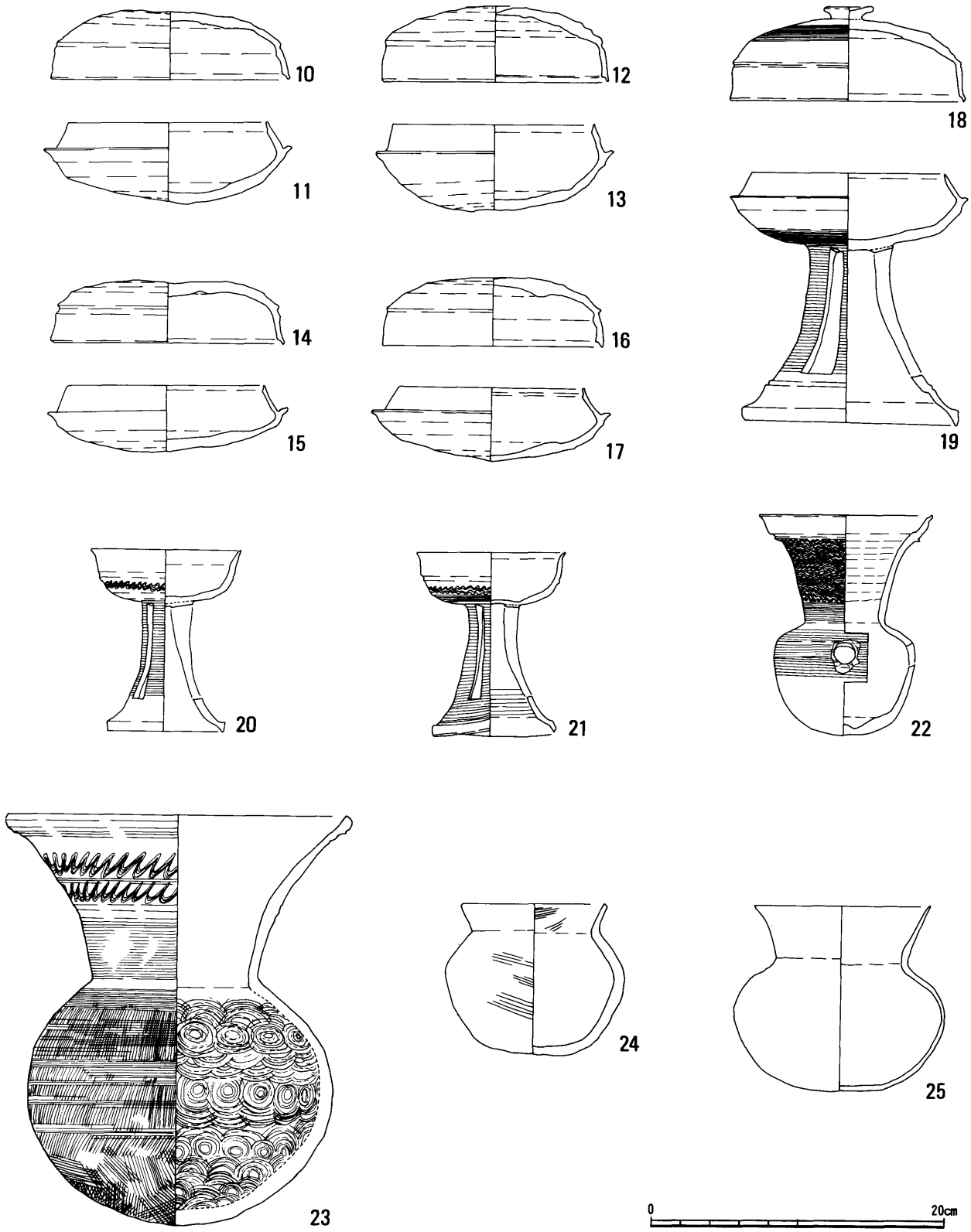
鏃(28～32)　長さは、およそ14～15cmの範囲におさまる。錆がひどく、全体が癒着した状態で出土した。現状では20本程度が確認でき、全て長頸鏃である。刃部の形態は、すべて小柳葉形のものである。鏃は先端部を南に向けて、20本程束ねた状態で出土した。矢は矢柄の部分まで残っており、全長は75～80cmであったと推定される。

それ以外に、大刀・鋤先・鉾と考えられる鉄製品がある。いずれも遺存状態が極めて悪く、実測不可能な状態であった。大刀は長さ約140cmで、遺体の東側に沿うように刃先を北に向けた状態で出土した。錆が激しい。鋤先は、前述の鎌・斧に近接した位置で出土したが、錆が激しい。薄い鉄板を折り、装着部をさらに折り込んでいる状況が観察される。鉾は、遺体の西側に沿うように刃先を南に向けて出土した。　（木野本和之）

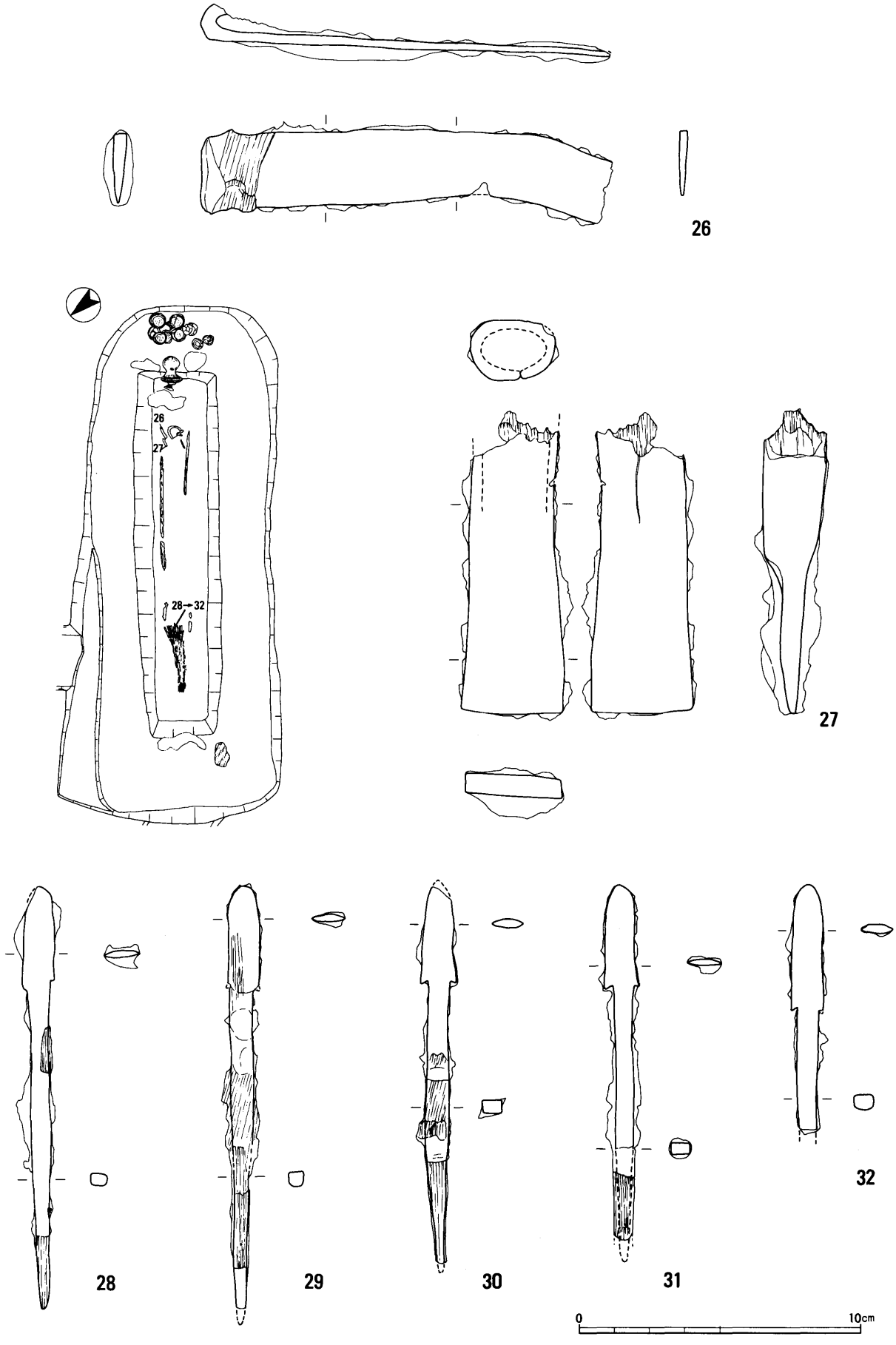
４．埋葬施設２

埋葬施設１と埋葬施設３の間で検出した埋葬施設である。これら２施設とは近接しているが、切り合い関係は認められなかった。埋葬施設２から埋葬施設３にかけては盗掘されており、盗掘が行われた時期にこの部分が古墳の中で最も高まった場所であった事が推察される。

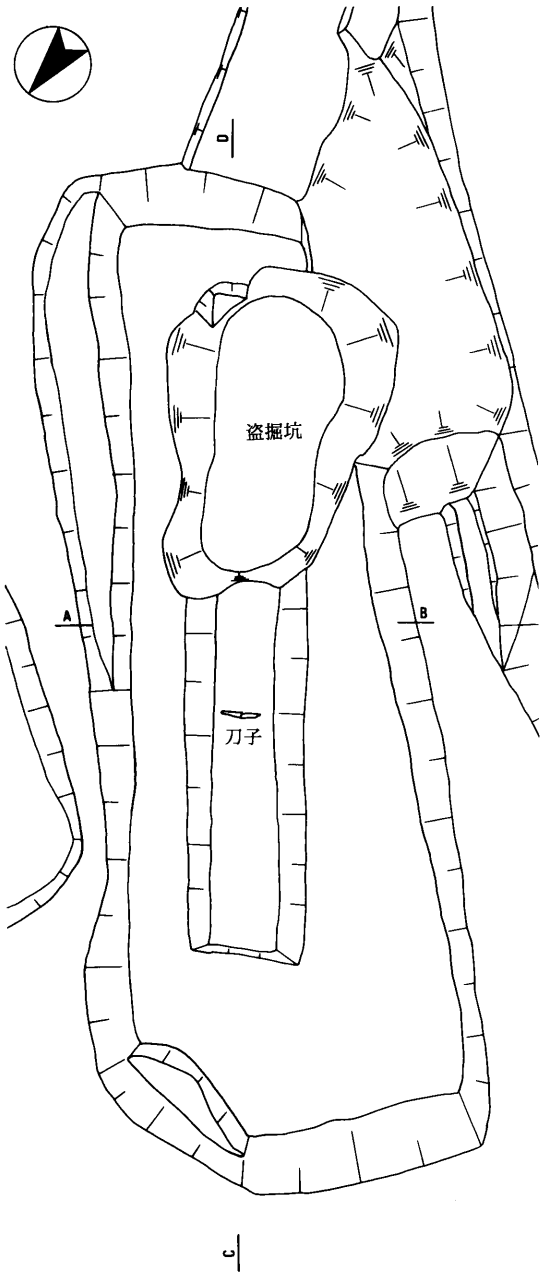
掘形は北側で幅2.0m、南側では幅1.5m、長さ5.5mの規模で検出されたが、南東隅から東辺部分は途中で掘削を中止したようにテラス状を呈し、北東隅には埋葬施設１同様にステップ状の施設を設け

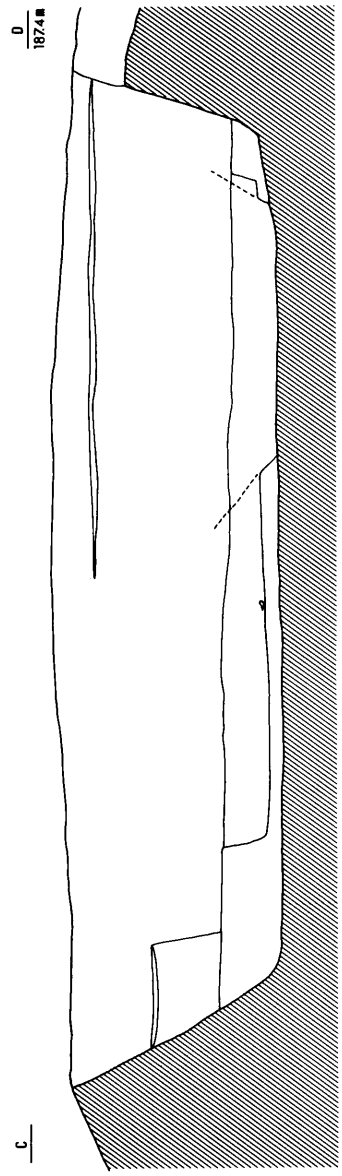


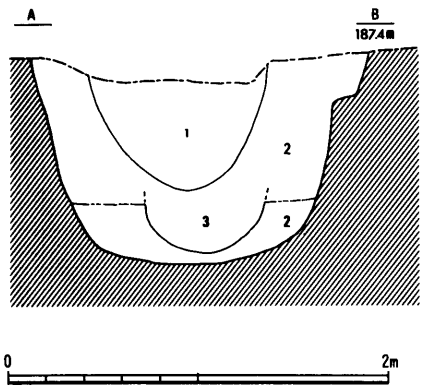
第13図　埋葬施設１棺南小口出土遺物　1:4



第14図　埋葬施設１棺内出土遺物　1:2

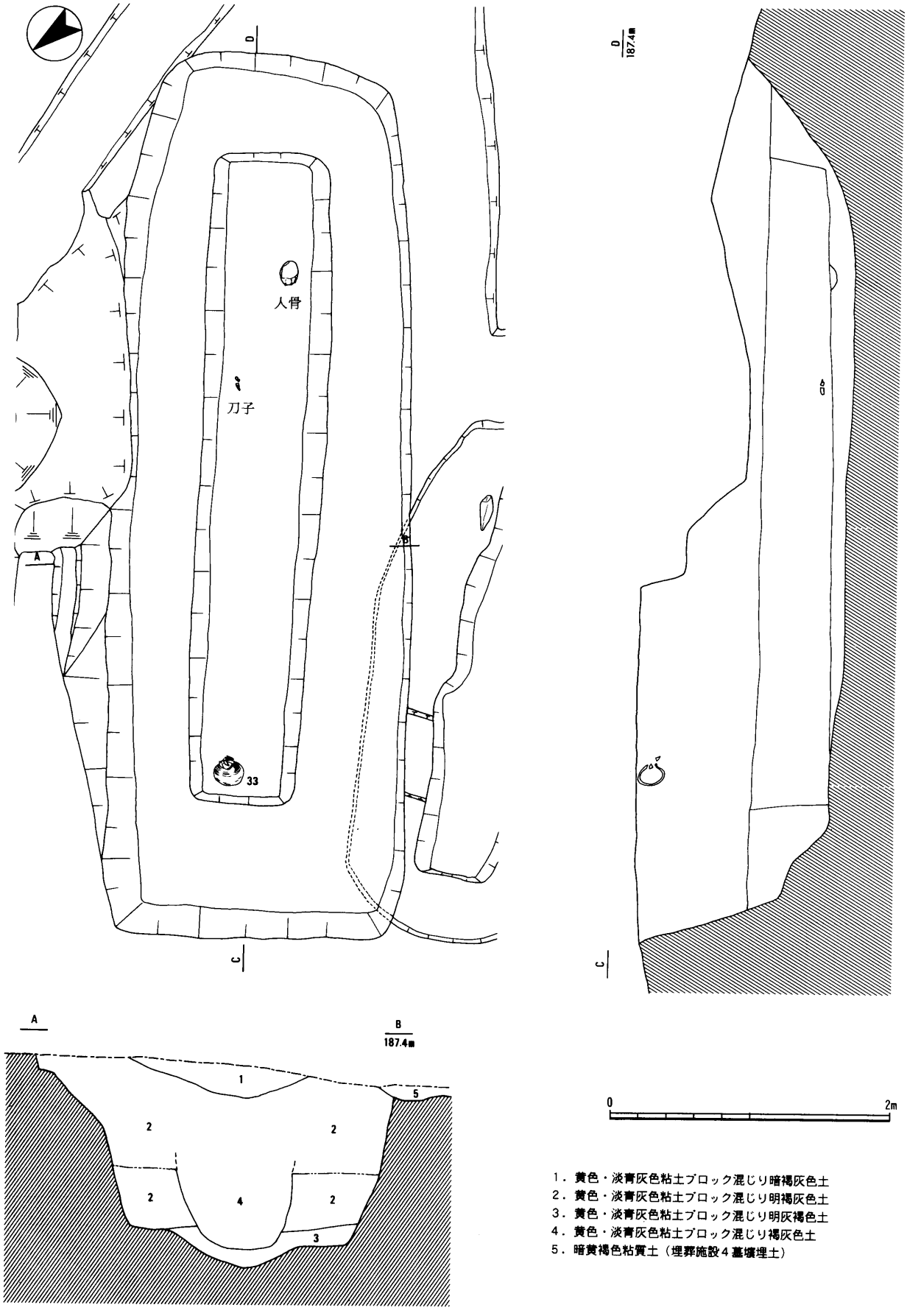




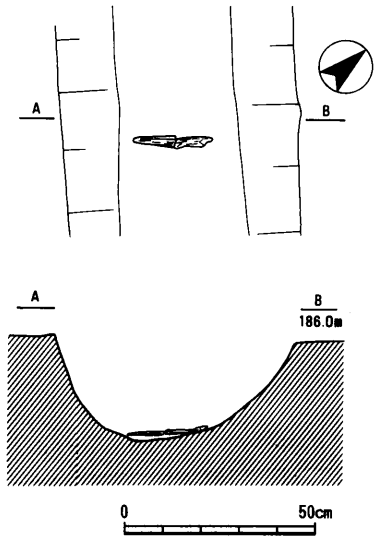


1．微砂混じり暗黄褐色土（盗掘壙埋土）
2．黄色・淡青灰色粘土ブロック混じり黄褐色粘質土
3．黄色・淡青灰色粘土ブロック混じり暗黄褐色粘質土

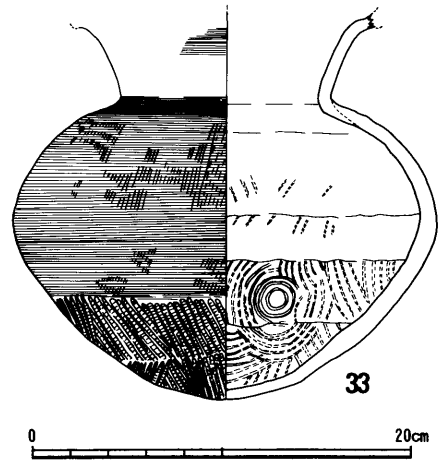
第15図　埋葬施設２平面図・立面図・土層断面図　1:40



第16図　埋葬施設３平面図・立面図・土層断面図　1:40



第17図　埋葬施設２棺内刀子出土状況　1:20



第18図　埋葬施設３掘形出土遺物　1:4

る。最深部で地表からの深さは1.8m、ステップ状施設までは約1.1mである。棺痕跡は方位N40°Wで、掘形の東辺に添う形で幅65cm、長さ3.6m、検出面からの深さ25cmの断面半円形の割り竹形のものが確認されたが、南側は盗掘をうけていた。小口部に粘土塊は認められず、棺内一面に赤色顔料が認められた。

埋葬施設２出土の遺物

出土遺物は掘形から出土した土師器片数点と、棺内には刃先を東に向けて横置きされた刀子１点のみであるが、遺存状態が極めて悪く実測は不可能である。盗掘されているため、棺内遺物が既に掘り出されている可能性がある。

５．埋葬施設３

埋葬施設１とほぼ同じ向きに造られている埋葬施設である。埋葬施設２と共に盗掘をうけているが、棺痕跡までは到達していない。

掘形は北側で幅2.1m、南側では幅1.8m、長さ6.3mの規模で検出された。埋葬施設１・２のようなステップ状の施設は設けられていないが、北辺が一段高くなっている。最深部で地表からの深さは約2.0m、北辺では約1.7mである。棺痕跡は方位N54°Wで、掘形のほぼ中央に幅90cm、長さ4.65m、検出面からの深さ55cmの断面半円形の割り竹形のものが確認された。小口部に粘土塊は認められず、棺内一面に赤色顔料が認められた。棺南小口から70cmの棺底に頭蓋骨の痕跡がしみ状円形に認められ、その中から顎骨と歯が出土した。

埋葬施設３出土の遺物

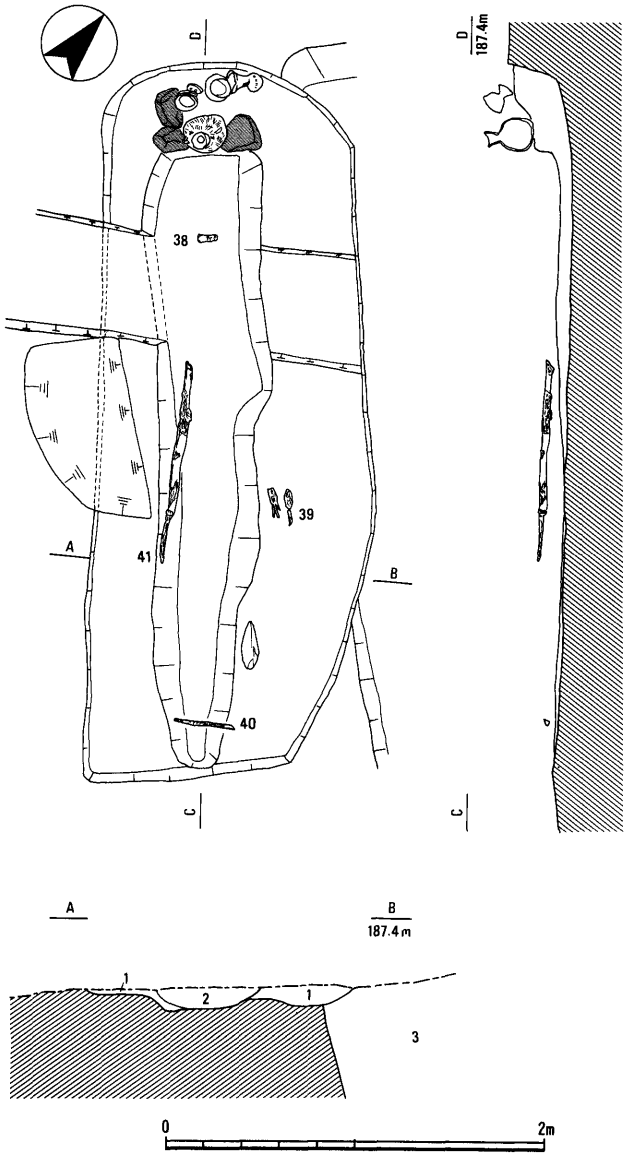
出土遺物は掘形から土師器片数点と口縁部が打ち欠かれた須恵器壺が出土している。棺内からは、僅かに形をとどめている遺存状態の悪い刀子が１点出土しているのみである。

須恵器壺(33)　墓壙上部で出土した壺で口縁部は打ち欠かれ欠損している。底部は尖り気味で、肩の張った体部から屈曲したラッパ状に開く口縁部をもつものと思われる。

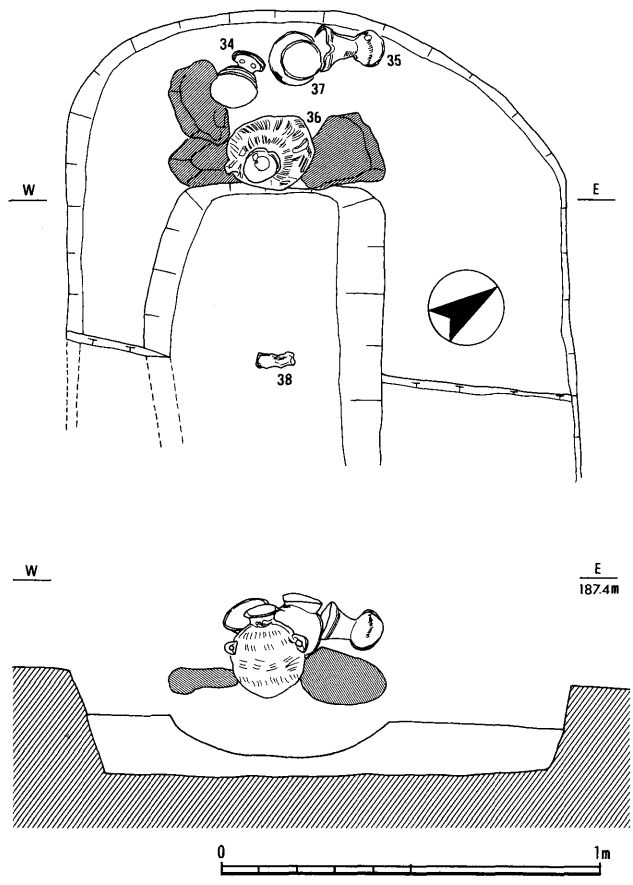
６．埋葬施設４

調査区の西端で検出された埋葬施設である。埋葬施設３の西側を切って造られている。表土直下で検出されたが、墓壙南側は削平され、もとの形状をとどめていない。現況では、掘形は北側で幅1.3m、中央南側では幅1.4mで、南側が広がっていたものと思われる。現存長は3.8mである。

棺痕跡は方位N43°Wで、北側で幅65cm、現況で長さ3.3m、検出面からの深さ15cmの断面半円形の割り竹形のものが確認されたが、南側は削平をうけていた。棺の東辺の南側には棺を固定したと考えられる石が１点出土している。残りの良い北小口部からは粘土塊が出土し、４点の土師器・須恵器が収められていた。棺内から大刀・刀子・鉄斧が出土し、棺東横から出土した鉄族も棺内の遺物であると思わ



第19図　埋葬施設４平面図・立面図・土層断面図　1:40



第20図　埋葬施設４棺北小口土器出土状況　1:20

れる。

埋葬施設４出土の遺物

遺物は棺北小口と棺内から出土した。棺北小口からは須恵器高杯・瓹・提瓶、土師器壺であり、瓹のみ口縁部が一部欠損しているが他は完形のものである。棺内では北側に斧が１点、中央西辺に刃先を北に向けた大刀が１点、大刀の東側には同じく刃先を北に向けた３点の鏃、南小口には刃先を東に向け横置きされた刀子が出土した。

棺北小口出土遺物

須恵器高杯(34)　杯部は稜をもち、口縁端部は内側に面にもつ。脚部はやや長く、端部はつままれ、三方に円形の透かしを穿つ。

須恵器瓹(35)　頸部に細かな波状文を一面に施し、体部中央に板状工具による刺突をめぐらす。

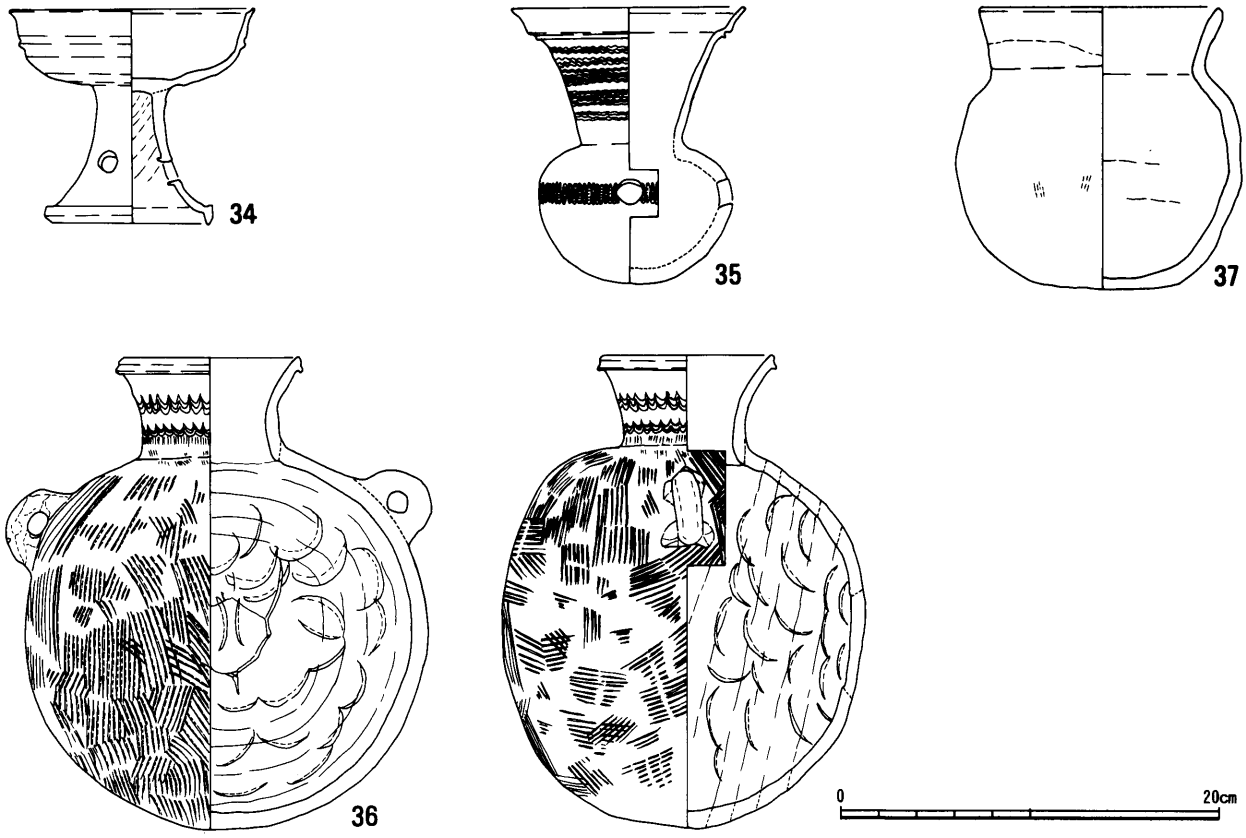
須恵器提瓶(36)　口縁部は僅かに外反し、２単位の波状文を施し端部は外側に肥厚する。体部は粘土紐を輪積みして作られ、中央部全面を粘土板で塞いでいる。体部外面は平行タタキ、内面は口縁部よりさしこまれた棒状工具の木口部で押圧されている。肩部には１対の把手が貼りつけられいる。焼きが非常にあまい。

土師器壺(37)　底部はやや平底状を呈する。体部内面には粘土巻上痕跡が見られ、外面はタテハケを施した後、板状工具でナデ消している。口縁部は上外方に短く延び、端部は丸くおさまる。

（増田　博）

棺内出土遺物

斧(38)　残存長8.7cm、最大幅4.0cm。棺北小口に近い位置からの出土。付け根部分を欠くが、縦方向



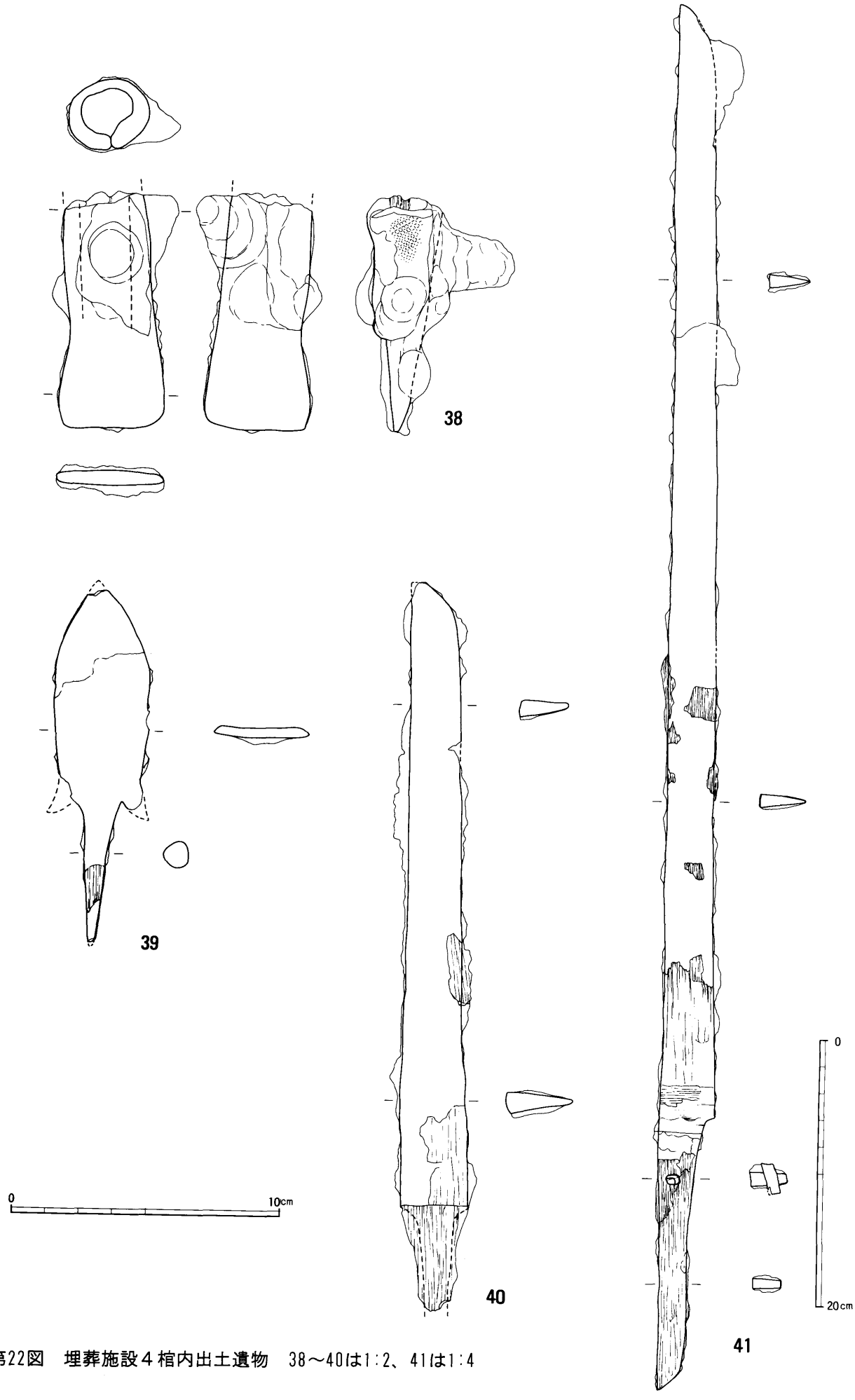
第21図　埋葬施設４棺北小口出土遺物　1:4

の木質が残る袋状の中空部分がある。側面には布目と思われる痕跡が認められ、布で包まれて埋納された可能性がある。

鏃(39)　残存長13.3cm、最大幅3.5cm。遺体の東側で、先端を北に向けた状態で出土した。現状では３点が確認できたが、ここでは、実測可能な１点のみを提示する。刃部の形態は柳葉形で、逆刺が両側につく。茎部分に、縦方向の木質が残っていることから、柄に装着した状態で埋納されていたものと思われる。

刀子(40)　残存長約28cm、最大幅約2.5cm、厚さ9.0mm。遺体足元に近い位置から、切先を東に向けた状態で出土した。刀身は、部分的に木質が付着した状態であることから、鞘に納めた状態で埋納されたものと思われる。茎尻部分は欠損するものの、木質が比較的よく残っている。

大刀(41)　全長約120cm、最大幅約4.0cm、厚さ1.0cm。平造の直刀である。遺体西側から、切先を北に向けた状態で出土した。刃は、棺の内側を向いていた。関は撫角で、胴部はやや先細となる。茎尻は、隅を斜めに落とした形状を呈する。目釘穴は、明瞭に観察できるものは１箇所であるが、木質の残った部分にも穿たれている可能性がある。部分的に木質が付着した状態であることから、鞘に納めた状態で埋納されたものと思われる。　（木野本和之）



第22図　埋葬施設４棺内出土遺物　38～40は1:2、41は1:4

No.	器　　種	出土位置	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎　　土	焼成	色　　調	残存度	備　　考
1	須恵器 杯蓋	墳丘Ⅱ区 裾部	口径　14.0 器高　5.3	天井部外面2/3以上回転ケズリ、内面回転ナデ。口縁部回転ナデ。	密。5mm以下の砂粒含む。	良好	明青灰色	70%	
2	須恵器 杯蓋	墳丘Ⅱ区 裾部	口径　(14.8) 器高　5.2	天井部外面2/3以上回転ケズリ、内面回転ナデ。口縁部回転ナデ。	密。1mm以下の砂粒少量含む。	良好	暗青灰色	20%	
3	須恵器 杯身	墳丘Ⅱ区	口径　(11.4) 受部径(13.8)	口縁部回転ナデ。底部外面回転ケズリ、内面回転ナデ。	密。3mm以下の砂粒含む。	良好	明青灰色	口縁部 25%	
4	須恵器 瓶	墳丘Ⅱ区	口径　(13.6)	外面回転ナデ後波状文、内面回転ナデ。	密。3mm以下の砂粒含む。	良好	暗青灰色	口頸部 20%	
5	須恵器 壺	墳丘Ⅱ区 墳丘Ⅳ区	口径　(16.4)	回転ナデ。	密。1mm程度の砂粒含む。	良好	暗青灰色	口縁部 30%	
6	土師器 椀	墳丘Ⅱ区 裾部	口径　10.0 ～11.0 器高　6.6	口縁部ヨコナデ。底部外面板状工具によるナデ、内面ナデ。	密。1mm程度の砂粒含む。	良好	明黄褐色	完形	内面及び口縁部外面炭素吸着
7	土師器 皿	墳丘Ⅱ区	口径　(6.2) 器高　0.9	指オサエ。	密。	良好	明黄褐色	30%	
8	須恵器 杯蓋	埋葬施設1 掘形埋土 墳丘Ⅱ区	口径　(13.2)	回転ナデ。	密。4mm以下の砂粒含む。	良好	外：黒灰色 内：明青灰色 断：暗赤灰色	口縁部 20%	
9	土師器 甕	埋葬施設1 掘形埋土	口径　(21.6)	口縁部ヨコナデ。体部外面ナナメハケ、内面ヨコナデ。	密。2mm以下の砂粒含む。	良好	明黄褐色	口縁部 10%	
10	須恵器 杯蓋	埋葬施設1 南側棺小口	口径　16.0 器高　4.6	天井部外面2/3回転ケズリ、内面回転ナデ。口縁部回転ナデ。	密。5mm以下の砂粒多く含む。	良好	青灰色	完形	11とセット
11	須恵器 杯身	埋葬施設1 南側棺小口	口径　13.4 受部径 16.7 器高　5.5	口縁部回転ナデ。底部外面2/3以上回転ケズリ、内面回転ナデ。	密。5mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	10とセット
12	須恵器 杯蓋	埋葬施設1 南側棺小口	口径　15.2 器高　5.1	天井部外面2/3以上回転ケズリ、内面回転ナデ後中心部一定方向のナデ。口縁部回転ナデ。	密。3mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	13とセット
13	須恵器 杯身	埋葬施設1 南側棺小口	口径　13.6 受部径 16.0 器高　5.9	口縁部回転ナデ。底部外面2/3以上回転ケズリ、内面回転ナデ後中心部一定方向のナデ。	密。3mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	12とセット 外面灰かぶり
14	須恵器 杯蓋	埋葬施設1 南側棺小口	口径　15.6 器高　4.2	天井部外面2/3以上回転ケズリ、内面回転ナデ後中心部一定方向のナデ。口縁部回転ナデ。	密。1mm程度の砂粒少量含む。	良好	青灰色	完形	15とセット
15	須恵器 杯身	埋葬施設1 南側棺小口	口径　13.2 受部径 16.2 器高　4.5	口縁部回転ナデ。底部外面2/3回転ケズリ、内面回転ナデ。	密。7mm以下の砂粒多く含む。	良好	青灰色	完形	14とセット 外面灰かぶり
16	須恵器 杯蓋	埋葬施設1 南側棺小口	口径　14.9 器高　4.6	天井部外面2/3回転ケズリ、内面回転ナデ後中心部一定方向のナデ。口縁部回転ナデ。	密。5mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	17とセット 外面灰かぶり
17	須恵器 杯身	埋葬施設1 南側棺小口	口径　12.6 受部径 16.6 器高　5.0	口縁部回転ナデ。底部外面2/3以上回転ケズリ、内面回転ナデ後中心部一定方向のナデ。	密。3mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	16とセット 外面灰かぶり
18	須恵器 有蓋高杯 蓋	埋葬施設1 南側棺小口	口径　16.0 器高　6.4	天井部外面カキメ、内面回転ナデ。口縁部回転ナデ。	密。5mm以下の砂粒多く含む。	良好	外：暗青灰色 内：青灰色	ほぼ 完形	19とセット 外面灰かぶり
19	須恵器 有蓋高杯	埋葬施設1 南側棺小口	口径　13.2 受部径 16.2 脚部径 14.4 器高　17.0	杯部口縁部回転ナデ、底部外面回転ケズリ後カキメ。脚部外面上半カキメ下半回転ナデ、内面回転ナデ。長方形三方透かし。	密。3mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	18とセット 外面灰かぶり

第１表　出土土器観察表（１）

No.	器　　種	出土位置	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎　　土	焼成	色　　調	残存度	備　　考
20	須恵器 高杯	埋葬施設１ 南側棺小口	口径　10.1 脚部径　7.8 器高　12.4	杯部口縁部回転ナデ、底部外面上半波状文下半回転ケズリ、内面回転ナデ。脚部外面上半カキメ下半回転ナデ、内面回転ナデ。長方形三方透かし。	密。２mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	外面火だすき 赤色顔料あり
21	須恵器 高杯	埋葬施設１ 南側棺小口	口径　10.1 脚部径　8.3 器高　12.5	杯部口縁部回転ナデ、底部外面上半波状文下半カキメ、内面回転ナデ。脚部外面上半カキメ下半回転ナデ、内面回転ナデ。長方形三方透かし。	密。３mm以下の砂粒含む。	良好	暗青灰色	完形	外面一部灰かぶり 赤色顔料あり
22	須恵器 瓶	埋葬施設１ 南側棺小口	口径　11.7 器高　12.5	口縁部回転ナデ。頸部外面波状文内面回転ナデ、巻上痕跡。頸部下半から体部上半外面カキメ、下半ナデ、内面回転ナデ。	密。３mm以下の砂粒含む。	良好	明青灰色	完形	穿孔付近使用による剥れあり
23	須恵器 壺	埋葬施設１ 南側棺小口	口径　22.8 器高　28.0	杯部口縁部回転ナデ、底部外面上半波状文下半カキメ、内面回転ナデ。脚部外面上半カキメ下半回転ナデ、内面回転ナデ。	密。３mm以下の砂粒含む。	良好	暗青灰色	完形	外部一部灰かぶり 赤色顔料あり
24	土師器 壺	埋葬施設１ 南側棺小口	口径　9.6 器高　10.3	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコハケ。体部外面ナナメハケ、内面ナデ。	密。３mm以下の砂粒含む。	良好	黄褐色	完形	赤色顔料あり
25	土師器 壺	埋葬施設１ 南側棺小口	口径　12.0 器高　12.5	ヨコナデ。	密。	良好	明黄褐色	完形	
33	須恵器 壺	埋葬施設３ 掘形埋土		口頸部外面カキメ、内面回転ナデ体部外面平行タタキ後カキメ、内面同心円タタキ。	密。	良好	明青灰色	体部 完存	外面火だすき
34	須恵器 高杯	埋葬施設４ 北側棺小口	口径　12.7 脚部径　8.2 器高　11.3	杯部口縁部回転ナデ、底部外面回転ケズリ、内面回転ナデ。脚部回転ナデ、内面シボリ痕跡。円形三方透かし。	密。７mm以下の砂粒含む。	良好	青灰色	完形	
35	須恵器 瓶	埋葬施設４ 北側棺小口	口径　12.1 器高　14.5	口縁部回転ナデ。頸部外面波状文内面回転ナデ。体部上半外面回転ナデ、下半ナデ、内面回転ナデ。体部外面中央部に板状工具による刺突。	密。３mm以下の砂粒含む。	良好	明青灰色	ほぼ 完形	
36	須恵器 提瓶	埋葬施設４ 北側棺小口	口径　9.1 器高　24.7	口縁部回転ナデ。頸部外面波状文接合部縦ハケ、内面回転ナデ。体部外面平行タタキ、内面回転ナデ後棒状工具の木口による押圧。	密。１mm以下の砂粒含む。	軟	明青灰色	完形	
37	土師器 壺	埋葬施設４ 北側棺小口	口径　12.5 器高　14.8	口縁部ヨコナデ。体部外面たてハケ後板状工具によるナデ消し、内面ヨコナデ。粘土巻上痕跡。	密。１mm以下の砂粒含む。	良好	明橙褐色	完形	

第２表　出土土器観察表（２）

Ⅳ 結　語

1．出土遺物について

土器について

今回の調査によって４基の埋葬施設が検出されたが、その中で土器がまとまって出土したのは埋葬施設１と埋葬施設４の２基であった。２基とも棺の小口部に、棺をある程度埋めた後に土器を埋納しているものである。また、墳丘裾部からもまとまって土器が出土している。

埋葬施設１からは、遺体の頭位側と考えられる棺の南小口に、須恵器蓋杯４セット・有蓋高杯１セット・高杯２・瓶１・壺１、土師器壺２が据えられていた。この中で須恵器蓋杯は全て蓋を身の下にあてがった状態で２列に並んで出土した。ここに蓋をはずして、その蓋は蓋杯の上に置かれた有蓋高杯、横置きされた高杯、土師器壺が加わりひとつのまとまりをつくっている。僅かに離れて土師器壺と倒位の須恵器高杯が置かれ、大型の須恵器壺と瓶は棺側へ倒れ込んでいた。

須恵器蓋杯を中心としたまとまった土器群は、「六文銭土器埋納行為」[1]を想定することが可能である。この中で、横置きされた高杯以外は正位で、器の中身を見せるように置かれていた。この横位の高杯を除く正位の土器群が「六文銭土器埋納行為」に相当するものであると考える。楠元氏の考えでは「六文銭状土器埋納行為」の場合は土器内に食べ物を入れないことを想定しているが、今回の場合、須恵器杯蓋や有蓋高杯の状況は、あたかも死者に土器の蓋を開いて食物を供えているようにも見受けられる。また、上野市喰代の高猿１号墳からはハマグリ・アワビ等が入った須恵器が出土しており[2]、高猿６号墳においても同一埋葬施設内に蓋を閉じた状態で須恵器蓋杯が５組出土しており[3]、食物の存在を伺わせる出土例が見られるが、今回の場合は、横位と倒位に置かれた高杯が蓋杯群と共に出土しており、これらが土器内に食物が入っていないことを示すために横位や倒位に置かれているものと推測する。このように考えると、蓋を開いた蓋杯・有蓋高杯は中身が入っていないことを見せるためのものであると推測することも可能である。この土器群を用いた祭祀において、楠元氏の述べられているように土器内に食物が入れられていなかったことが想定できる。

出土土器の時期についてはほとんどが田辺昭三氏の陶邑編年のＭＴ15型式[4]に相当するもので、有蓋高杯のみ脚部が長脚化しており、ＴＫ10型式にまで下る可能性のあるものである。

埋葬施設４からも棺北小口から須恵器高杯・瓶・提瓶、土師器壺がまとまって出土した。埋葬施設１では「六文銭土器埋納行為」と考えられる須恵器蓋杯を伴なっているのに対し、埋葬施設４では蓋杯が見られず、「六文銭土器埋納行為」を行っていない可能性が高い。しかし、埋葬施設１の須恵器蓋杯を中心としてまとまって置かれた土器群以外の土器（須恵器壺・瓶・高杯、土師器壺）と埋葬施設４出土の土器（須恵器提瓶・瓶・高杯、土師器壺）を比べると、埋葬施設１の須恵器の壺が、埋葬施設４では提瓶に置き換わっているのみで、器種構成は類似している。このことから、埋葬施設４の場合、頭位と考えられる南側小口は削平されているため、こちら側で須恵器蓋杯を含む土器群による「六文銭土器埋納行為」を行った可能性も残る。

土器の時期については、瓶は埋葬施設１出土のものと形態・大きさとも酷似しており、埋葬施設１同様にＭＴ15型式からＴＫ10型式の範疇でおさまるものと考える。

墳丘裾部の周溝状遺構脇から出土した須恵器杯身・杯蓋、土師器椀については、墳丘上の遺物が滑落したとも考えられるが、土師器の椀が完形で出土しているため墳丘裾部で祭祀行為が行われたとも考えられる。　（増田　博）

鉄製品について

今回の調査によって検出された４基の埋葬施設のうち、鉄製品がまとまって出土したのは埋葬施設１と埋葬施設４の２基である。他の２基からは、刀子各１点が出土したのみである。

埋葬施設１には、大刀・鉾・鏃などの武器と鎌・斧・鋤などの工具がまとまって埋納されていた。出土した鉄製品のなかでも、特に注目すべきは鏃である。被葬者の足元で、先端部を南に向けた状態の小

柳葉形の長茎鏃を20本ほど確認した。検出当初、柄・矢羽の部分も明瞭に観察できる状態で、それから推定できる矢の全長は80cm前後である。これは、石山古墳出土の矢とほぼ同じ長さであり[5]、当時の矢の標準的な長さであるものと推測される。

また、埋葬施設４からは大刀・刀子・鏃などの武器のほか、道具としては斧が出土している。大刀は全長約120cmの大型のものである。鏃は、埋葬施設１出土のものと異なり大型の柳葉形が２点出土している。

南山ノ奥６号墳は、丘陵の最高所に位置し、同古墳群で最大級の規模をもつ。そのような立地条件をもつ６号墳に、まとまった量の鉄製品が埋納されていたことから、古墳を築造した集団内の盟主級の被葬者を想定することが可能であると考える。また、鉄製品の出土状況は、前述の土器の状況とも一致しており、種類・量ともに埋葬施設１が突出し、埋葬施設４がそれに次ぎ、他の２基は刀子が各１点という状況となる。これは、南山ノ奥６号墳被葬者間の集団内での関係あるいは性別を知る上での手掛かりとなるものと考えられる。　　（木野本和之）

２．埋葬施設について

埋葬施設は、調査した範囲内では４か所が確認され、全て割り竹形木棺を直葬したものであった。この中で、埋葬施設４のみ埋葬施設３を若干切って造られている。

まず、個々の埋葬施設を比較しながら検討してみる。

掘形については、埋葬施設１と埋葬施設３が方向・規模とも類似している。埋葬施設２は当初これら２施設に向きを揃えて掘り始めたものを途中で東辺の向きを棺の方向に変えたのではないかと推察される。東辺に見られるテラス状の部分がそのために残ったものと考えられる。埋葬施設４は遺構の残存が悪いため形状や規模は不確かであるが、向きは埋葬施設２の棺の方向に近似している。

ステップ状の施設は埋葬施設１・２で見られるが、２施設では造り方に違いが見られる、埋葬施設１のステップ状施設は掘形の北東隅から東側に張り出したように造られているのに対して、埋葬施設２のものは北東隅の内側に造っている。埋葬施設３はステップ状の施設はないものの、掘形の北辺が一段浅く造られている。埋葬施設４には確認できなかった。このようなステップ状施設については、他では阿山郡阿山町所在の源六谷１号墳の調査において検出された、３基の埋葬施設の内の中心の最も大きな埋葬施設でも確認されており、ここでも北東隅に造られている[6]。

棺については、４施設とも断面が半円形状の痕跡が確認され、割り竹形木棺と考えられる。埋葬施設１・３の棺の向きは掘形同様に等しく、埋葬施設２・４の方向も近似している。規模は、埋葬施設１が幅1.0m・長さ4.3m、埋葬施設２が幅0.65m・長さ3.6m、埋葬施設３が幅0.9m・長さ4.65m、埋葬施設４は現況で幅0.65m・長さ3.3mであり、埋葬施設１・３、埋葬施設２・４はそれぞれ類似している。

棺小口の粘土塊については、埋葬施設１は両小口に、埋葬施設４は残りの良い北側のみに認められ、埋葬施設２・３は認められなかった。

出土遺物についても、前述したように掘形出土以外のものは、埋葬施設１・４は豊富な棺内の鉄製品と棺小口の土器群をもち、埋葬施設２・３は棺内の刀子１点のみである。

以上のことから、各埋葬施設の構築順序と関係を考察する。まず、埋葬施設１と埋葬施設３、埋葬施設２と埋葬施設４はそれぞれ掘形や棺の方向・規模などが類似しており、これら２組の埋葬施設はセット関係にあってよく似た規格で造られたものであると推察される。

また、棺内や棺小口からの出土遺物や、棺小口の粘土塊の有無などから、埋葬施設１と埋葬施設４、埋葬施設２と埋葬施設３にはは類似点が多い。このことは被葬者の性格、例えば性別によるものではないかと考える。性別であるとすると、埋葬施設１と埋葬施設４は棺内に大刀を副葬しており、男性であると考えられるため、大刀を副葬していない埋葬施設２と埋葬施設３は女性であると考えられる。

次に埋葬された順序であるが、出土遺物からは埋葬施設の新旧を特定する情報は得られなかった。そのため、それ以外の状況から考察を加えてみる。まず切り合い関係では、埋葬施設４が埋葬施設３を

切って造られていることから、埋葬施設４が埋葬施設３よりも新しいことは確定している。また、埋葬施設１～３の掘形の深さがほぼ揃っているのに対して、埋葬施設４の掘形は極端に浅い。このことから、埋葬施設１～３の構築時期は近く、埋葬施設４が最後に造られたものと考える。埋葬施設１～３の構築順序については、埋葬施設２の掘形が当初は埋葬施設１・３と向きを揃えて掘削していたのを途中から変更して向きを変えた形跡がみうけられる。このことから、埋葬施設１・３が造られた後にこれらを意識して造られたものと考えてほぼ間違いない。また、埋葬施設４は埋葬施設２の棺の方向を当初から意識して造られているため掘形と棺の方向が揃っているものであると考える。

最後に、埋葬施設１と埋葬施設３の前後関係であるが、現況で見るかぎり古墳の中心に近いのは埋葬施設３である。また、盗掘が埋葬施設２・３で行われていることから、盗掘を受けた時点では埋葬施設２・３付近が古墳の中で最も高まった場所であったと考えられる。中心部から埋葬施設を造っていったのなら埋葬施設３が最初に造られたものであると言える。また、当初から追葬を予定していたのなら埋葬施設１から造り始めたものと言える。現時点では埋葬施設１と３の前後関係は不明である。

以上のことをまとめると、埋葬施設の構築順序は３（女）・１（男）→２（女）→４（男）、であると考える。なお、埋葬施設３から２までは切り合い関係が認められないことや、掘形の深さが揃っていることから比較的近い時期に造られており、埋葬施設４はこれらよりはやや時間が経過してから造られたものであると考える。しかし、遺物の項で述べたように埋葬施設１と埋葬施設４出土の遺物には時期差が認められないため、ＭＴ15型式からＴＫ10型式併行期の間に、実年代では６世紀初頭から前半に４基の埋葬施設は造られたものと考えられる。

なお、現在埋葬施設３出土の顎骨及び歯の鑑定を依頼しているため、その結果が報告された際には、性別の問題は確定するものと考える。（増田　博）

〈註〉

1　楠元哲夫「六文銭－古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景－」（『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ５．　1992）

楠元氏の「六文銭」土器埋納行為とは、杯蓋・杯身を２列に各３組を連銭状に配置したものを中心に、中には他の土器に置き換えたり、周囲に土器・鉄製品・玉類を添える土器埋納行為を言う。埋納場所・配置の構成から１類～４類の変遷を想定し、南山ノ奥６号墳埋葬施設１の場合は、埋納される場所は３類（ＭＴ15～ＴＫ43型式）、配置の構成は２類（ＭＴ15～ＴＫ43型式）に相当するものと考えられる。

2　吉村利男「上野市喰代　高猿６号墳」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981）

3　大西源一「喰代の古墳」（『考古学雑誌』第２巻第９号　1912）

4　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

5　『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第６冊　1993

6　岡本武和・藤井尚登『奥弁天号墳・源六谷１号墳』阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会　1989

付編　南山ノ奥6号墳から出土した赤色顔料の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

南山ノ奥６号墳は、木津川右岸の丘陵上に位置する直径20m前後の円墳である。出土した遺物から、６世紀前半に構築されたと考えられ、木棺直葬の埋葬施設が確認されている。本古墳では、４人分の埋葬施設（埋葬施設１～４）が検出されており、遺物とともに赤色顔料が検出されている。

日本における赤色顔料としては、辰砂（水銀朱）やベンガラ（赤鉄鉱など）が一般的である。これらは、Ｘ線回折分析により識別が可能である。本報告では、これらの赤色顔料についてＸ線回折分析を行い、その種類を明らかにする。

2. 試料

試料は、南山ノ奥６号墳の埋葬施設１～４から出土した赤色顔料各１点の、計４点である。

3. 方法

分析は、足立(1980)および日本粘土学会(1987)を参考にした。土壌中に混在する赤色顔料をピンセットで抽出した後、105℃で２時間乾燥した。これをメノウ乳鉢で微粉砕した後、アセトンを用いてスライドグラスに塗布し、Ｘ線回折試料について、以下の条件で測定した。

同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物、または鉱物をＸ線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索した。

装置：島津製作所XD-3A	TimeConstant:2.0sec
Target：Cu（Ｋα）	ScanningSpeed:2°/min
Filter：Ni	ChartSpeed:2cm/min
Voltage：30KVP	Divergency:1°
Current：30mA	RecievingSlit:0.3mm
CountFullScale:5,000C/S	
ScanningRange:2～45°	

4. 結果

各赤色顔料のＸ線回折図を、第23図に示す。以下に、各試料の観察結果について記す。

(1) 埋葬施設１赤色顔料サンプル

ピークとして検出された鉱物は、石英・斜長石(plagioclase)・赤鉄鉱・カオリン鉱物(kaolin)の６種類である。なお、本試料は約20°（２θ)付近からややベースが高くなっていることから、酸化鉄を含んでいることが指摘される。

(2) 埋葬施設２赤色顔料サンプル

ピークとして検出された鉱物は、石英・カリ長石・赤鉄鉱・カオリン鉱物・雲母鉱物(micaminerals)の５種類である。なお、本試料は約20°（２θ)付近からややベースが高くなっていることから、酸化鉄を含んでいることが指摘される。

(3) 埋葬施設３赤色顔料サンプル

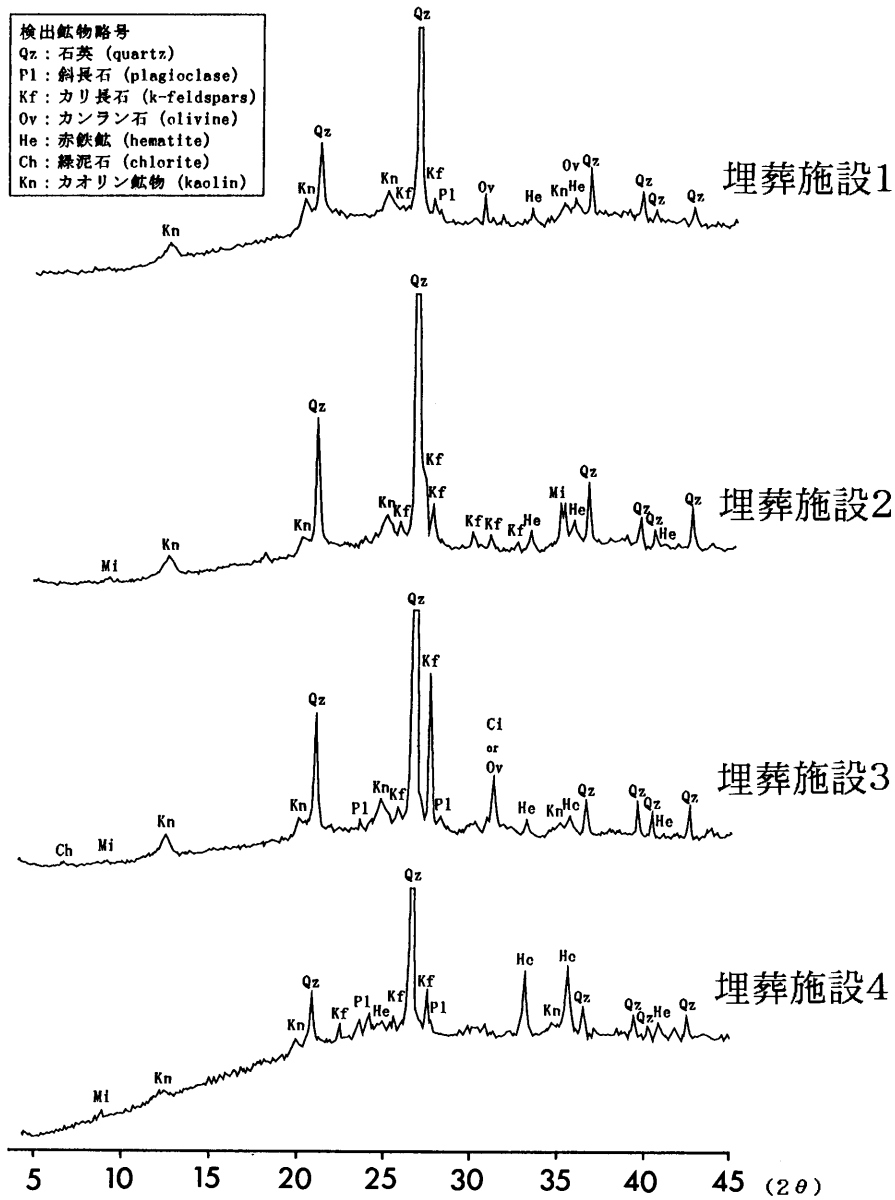
ピークとして検出された鉱物は、石英・斜長石・カリ長石・赤鉄鉱・カオリン鉱物・緑泥石(chlorite)・雲母鉱物の７種類である。また、カンラン石あるいは辰砂(cinnabar)と定性される31.2°にピークが認められる。なお、本試料は約20°（２θ）付近からわずかにベースが高くなっていることから、酸化鉄を含んでいることが指摘される。

(4) 埋葬施設４赤色顔料サンプル

ピークとして検出された鉱物は、石英・斜長石・カリ長石・赤鉄鉱・カオリン鉱物・雲母鉱物の６種類である。なお、本試料は約20°（２θ)付近から著しくベースが高くなっていることから、酸化鉄を含んでいることが指摘される。

5. 考察

埋葬施設１～４から検出された赤色顔料は、いずれも検出鉱物として赤鉄鉱が認められることから、いずれもベンガラと考えられる。しかし、埋葬施設３の赤色顔料サンプルでは、カンラン石あるいは水銀と定性されるピークが確認されており、水銀朱も含まれている可能性がある。実際に、天然の辰砂は必ずベンガラを伴い、ベンガラもまた水銀朱を伴うことがあり、遺跡出土の赤色顔料でも両者が混じる結果が得られたことがある（市毛、1998)。埋葬施設



第23図　南山ノ奥６号墳出土赤色顔料のＸ線回析図

３の赤色顔料についても水銀朱を含有するベンガラの可能性があるが、水銀朱の最も強い回折線と石英の最強回折線とが重複するため、今回の結果からは詳細が不明である。

古墳時代の石室側面の赤色顔料には、圧倒的にベンガラが多く、石室内外面にベンガラを塗布することで外気の遮断や内部の空気中から酸素を吸着し、遺体を保存する意味があるとの指摘もある（市毛、1998）。今回の結果についても、同様に木棺内等にベンガラを塗布することで、遺体の保存などを計った可能性がある。

〈引用文献〉

足立吟也「粉末Ｘ線回折法」（『機器分析のてびき３』化学同人　1980）
木田光子「出土ベンガラの多様性について」（『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』1997）
市毛　勲『新版　朱の考古学』雄山閣　1998
加納　隆「金属鉱床」（『日本の地質５　中部地方Ⅱ』共立出版　1988）
日本粘土学会『粘土ハンドブック　第２版』博報堂出版　1987
岡田文男「パイプ状ベンガラ粒子の復元」（『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』1997）
降旗順子・沢田正昭「酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究」（『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』1997）

図版１

表土除去作業

埋葬施設１掘削作業①

埋葬施設１掘削作業②

埋葬施設１鉄製品検出作業

伊賀上野ＣＡＴＶの取材

調査風景①

調査風景②

現地説明会

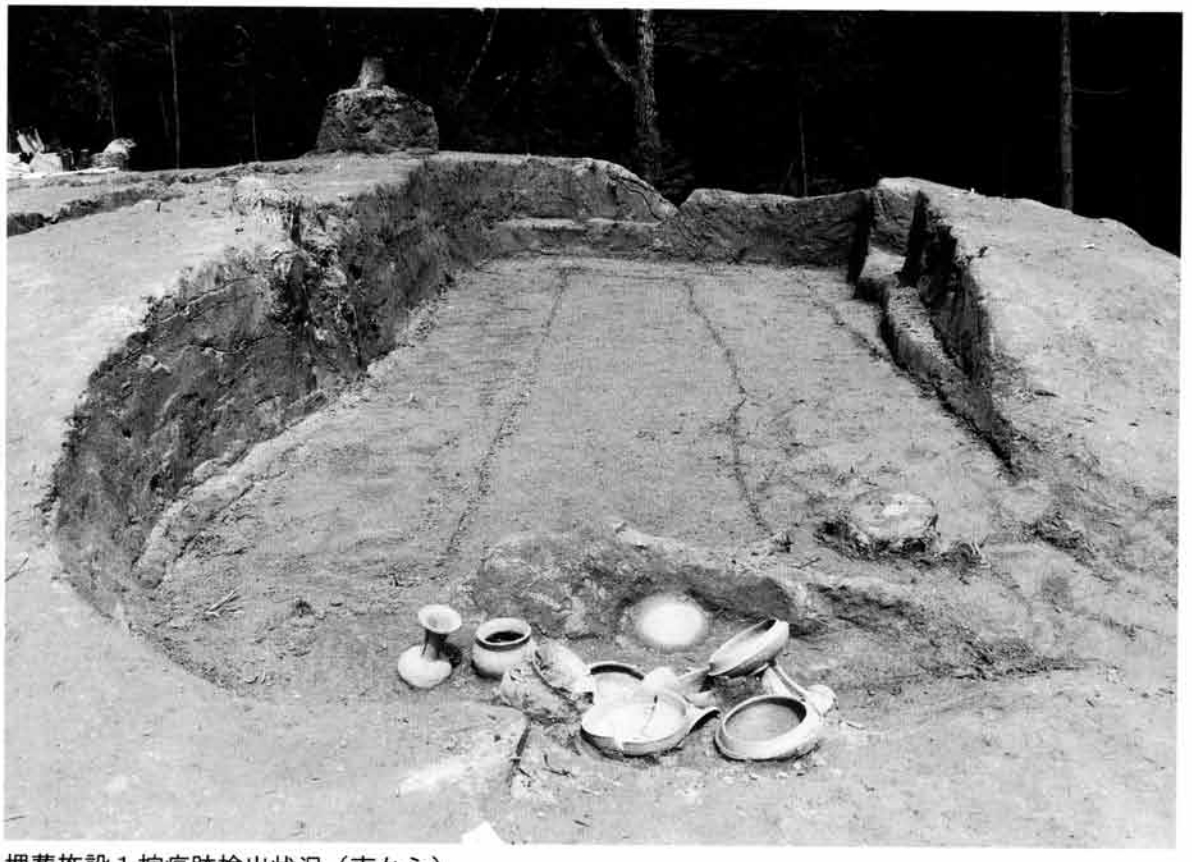
北上空からの南山ノ奥６号墳（左後方は国史跡城之越遺跡）

調査区全景（真上から）

図版３

調査前風景（南から）

表土除去後風景（南から）



埋葬施設１棺痕跡検出状況（南から）

埋葬施設１遺物出土状況①（東から）

埋葬施設１遺物出土状況②（北から）

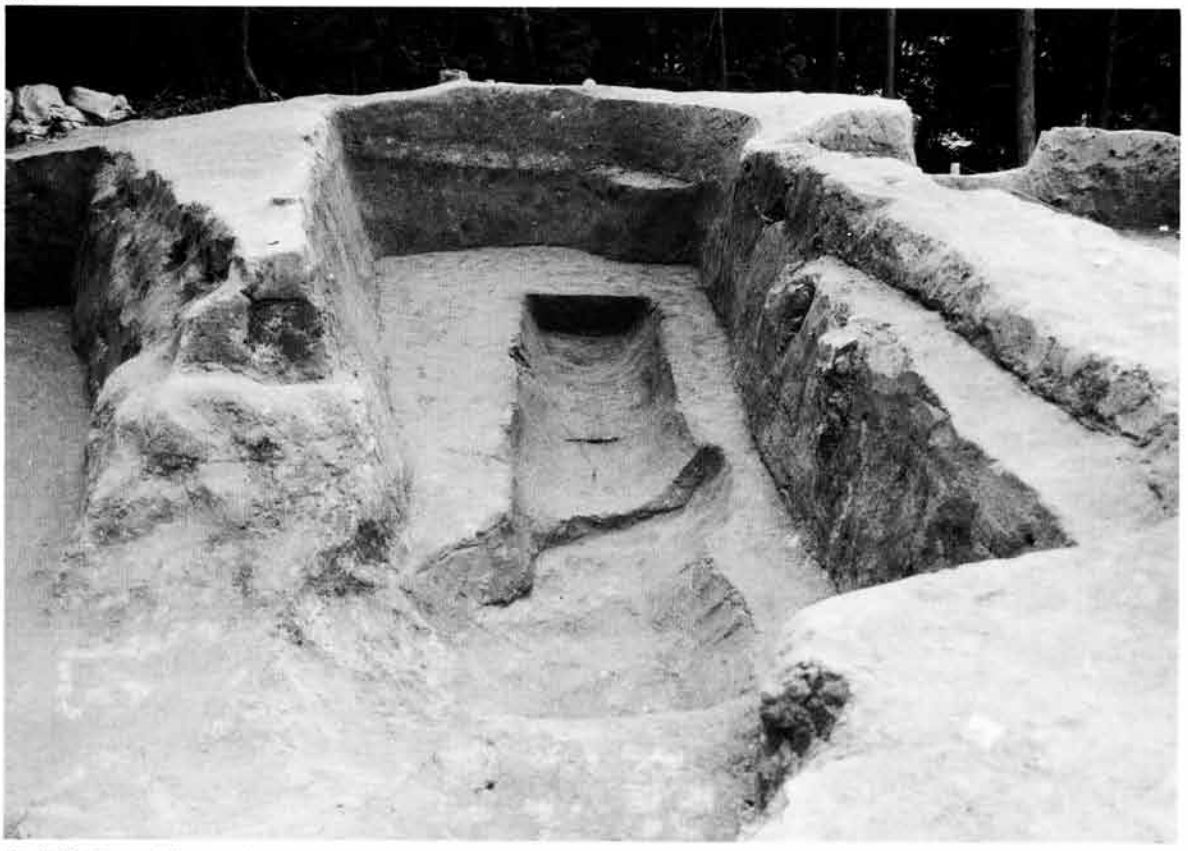
埋葬施設１（北から）

埋葬施設１遺物出土状況③（南から）

埋葬施設１遺物出土状況④（東から）

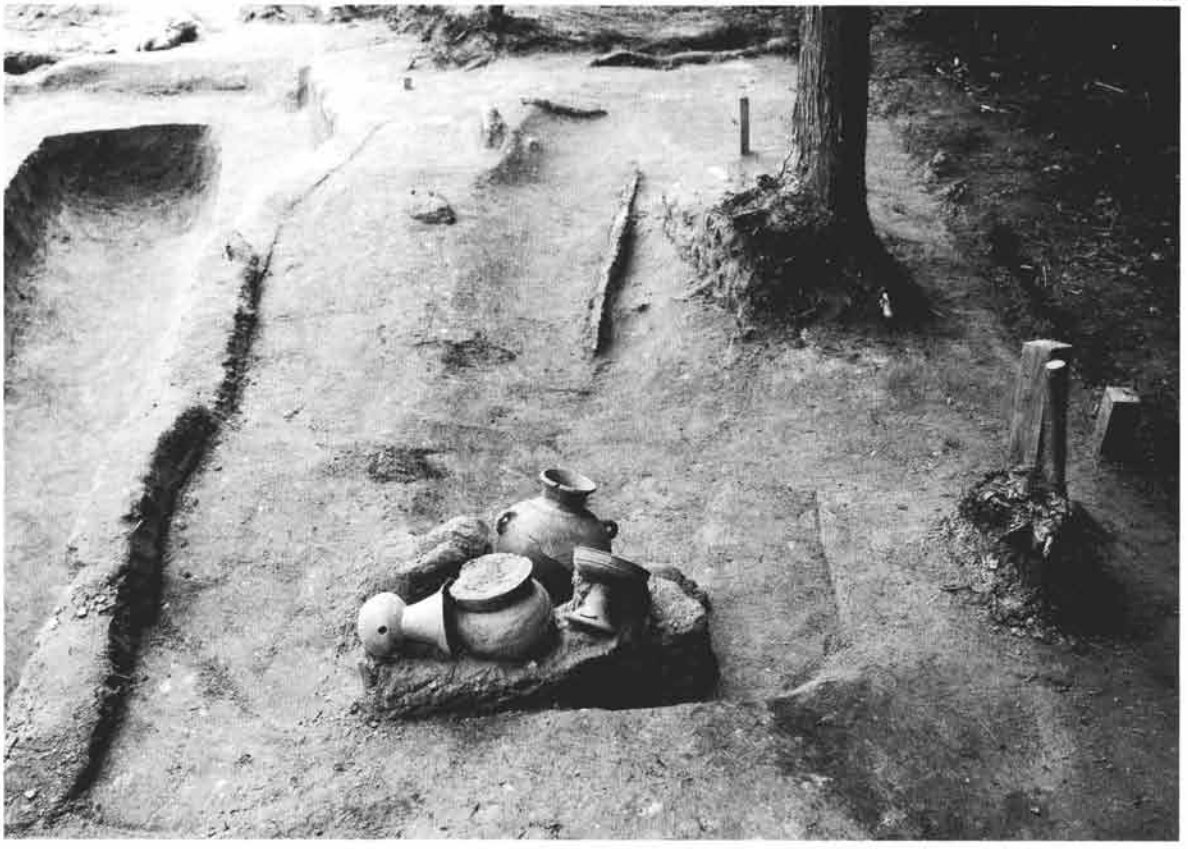
埋葬施設１遺物出土状況⑤（北から）

図版５



埋葬施設２（南から）

埋葬施設３（北から）



埋葬施設４（北から）

埋葬施設４遺物出土状況（南から）

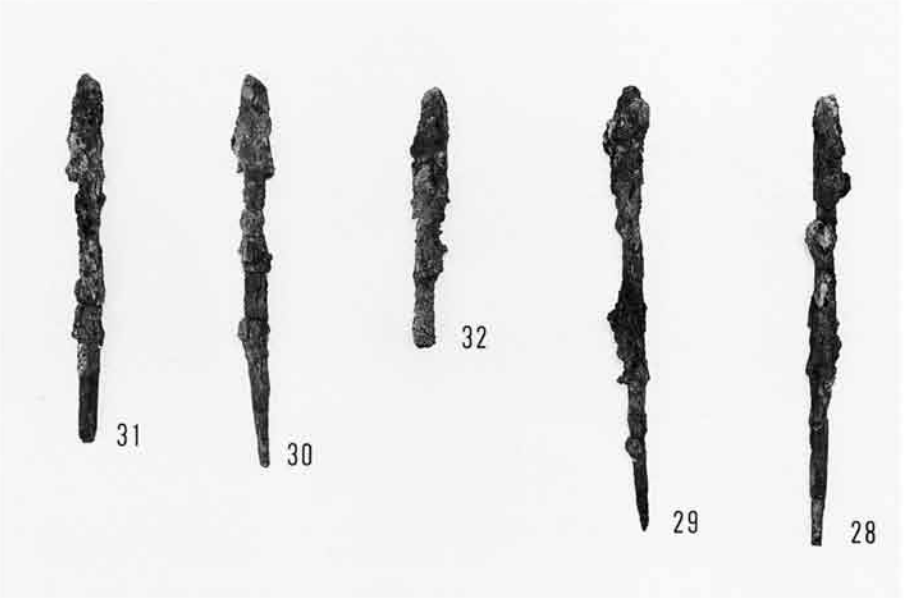
図版７

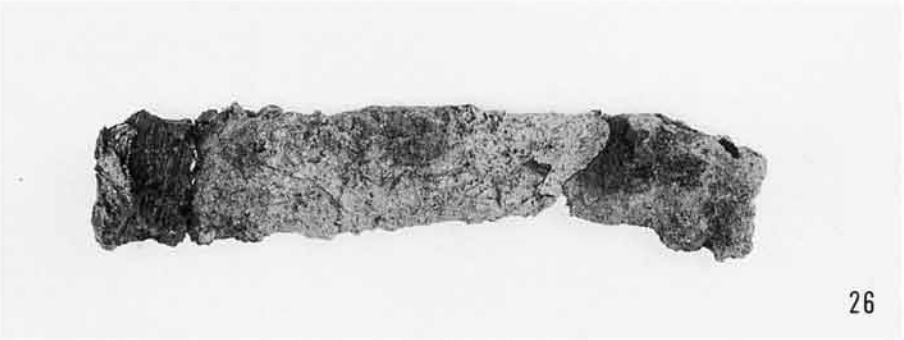
埋葬施設１棺南小口出土遺物

埋葬施設４棺北小口出土遺物

墳丘盛土内ほか出土遺物

図版９





埋葬施設１・４出土鉄製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	みなみやまのおくろくごうふんはっくつちょうさほうこく
書名	南山ノ奥6号墳発掘調査報告
副書名	上野市古郡所在遺跡の調査
巻次	なし
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	196
編著者名	木野本　和之　　増田　博
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325三重県多気郡明和町竹田503番地　TEL0596-52-1732
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
南山ノ奥６号墳	三重県上野市古郡字南山ノ奥	24206	682	34°40′41″	136°9′55″	19980701～19980818	100	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（上野南部２期地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南山ノ奥６号墳	古墳	古墳時代	・埋葬施設　４基 ※木棺直葬 ・周溝状遺構	土師器、須恵器、鉄製品（大刀、刀子、鉾、鏃、鎌、斧、鋤先）人骨、歯	

平成11(1999)年３月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告１９６

南山ノ奥６号墳

発掘調査報告
－上野市古郡所在遺跡の調査－

１９９９年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　オリエンタル印刷株式会社